三ツ星は夏空を見上げて

浅田和哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三ツ星は夏空を見上げて

【Ｎコード】
Ｎ９６１３Ｖ

【作者名】
浅田和哉

【あらすじ】
「バンドやろうぜ！」
数ヶ月前、親友が放った一言が僕の高校生活を変えた。
可愛い女の子に腹部を殴られたり、渡り廊下でライブしたり、クラスの歌姫が泣き出したり、弁当箱から黄色いバブルス〇イムが出現したり！
とにかく日常にごく近い非日常で、絶賛青春中の高校生バンド２年の夏！

七月七日

7月になった途端に、すっかり暑さを増した日本列島。
去年は、こんなに暑くなかったはずだ。
地球温暖化は、僕が思っている以上に深刻らしい。

そんなことを考えている、僕は今、教室で授業を受けている。
教壇に立ち、眠っている生徒を無視しながら授業を絶賛進行中の中田先生は、この暑い中、涼しい顔をしている。
しかし、そんな中田先生も、僕以外全員が机に突っ伏したときは、さすがに黙っていなかった。

「おいおい、暑いのは解るが、さすがに全員眠ってたら教える相手がいない。一人でいいから起きてくれ」

一人でいいのかよ。
って、僕、起きてんだけど……
先生、忘れてない？

「誰も起きん……おっ！　藤沢、起きたか」

「ずっと起きてました。そして、ずっと顔を上げて黒板を見てました」

「お？　そうだったか。授業が始まったときに一番眠そうな目をしていたからな」

なに？　一番眠そうな目をしていた？
授業が始まったとき、眠気などイチミリもなかったぞ。

「先生、誰かと間違えてませんか？」
「いや、そんなはずはない。あの眠そうな目は、藤沢だ。というか藤沢、お前今も眠そうな目をしてるぞ？」
今だって眠気などない。
眠そうな目などしているはずがない。
「今も、と言うより、いつも、だな」
どうやら先生は、僕がいつも眠そうな目をしていると言いたいらしい。
さすがに性格温厚で有名な僕、藤沢真琴でも黙っていなかった。
「失礼な！　いつも眠そうな目？　僕は、普段から同じ目をしてるんです、生れつきこういう目なんです！」
僕の勢いに押されたのか、中田先生は、一歩後ろに下がって黒板にぶつかった。
「す、すまん。つい、からかいたくなってな」
この人、ホントに教師かよ……。
「まぁ、いいです。許します。コペルニクスファンに悪い人は、いないはずです」
「さすが藤沢！　分かってるな。コペルニクスファンに悪い人は、

いない！」

中田先生がそう言った瞬間、授業終了のチャイムが鳴った。

「あ、終わった」

「先生、次からは、授業してくださいね」

「あ、あぁ」

中田先生は、どうもふに落ちないといった面持ちで、教室から出ていった。

それもそうか。僕一人しか起きてない教室で授業やれなんて、そりゃ無理か。

僕は、教室を見回した。

三十九人が机に突っ伏している。

隣の席の音無奏もすやすや眠っていた。

遥か遠くの席の枝川雄貴もガッツリ眠っていた。

そんな奏と雄貴、そして僕はバンドを組んでいる。

それにしても本当に同情するよ、中田先生。

僕は、掃除の時間になるまで四十人いる教室で独りだった。

掃除中のプレイボール

「いやー、やっと授業、終わったな！　あとは掃除か」

雄貴は、背伸びをしながら言った。

「寝てたくせによく言うよ」

「だって怠いじゃん。授業とかさ、退屈なだけだし」

「こうしてダメ人間が生まれるんだね」

雄貴は、素振りをするように、ホウキを振った。

僕の言ったことを否定するように、ホウキが空を切り、音が鳴った。

「大丈夫だよ、そこそこ点取ってるし。みんながみんなダメ人間になるわけじゃないんだよ」

確かに雄貴は、テストになるとそこそこの点を取る。

そのうち、失敗するような気もするが。

「さて、掃除も終わったし、一打席勝負でもしますか」

「雄貴は、ほとんど掃除してなかったけどね。まぁいいよ。僕がピッチャーね」

僕は、近くにあった雑巾を丸めると、ホウキを構えてる雄貴のほうを向いた。

「いくよ」

「おう」

僕は、大きく振りかぶって、ボール（雑巾）をストライクゾーンに投げた。

雄貴は、それをジッと見てバット（ホウキ）を振ったが、バット（ホウキ）は、空を切った。

そして、バット（ホウキ）に当たらなかったことで、そのまま突き進むことになったボール（雑巾）は、偶然後ろで屈んでゴミを拾おうとしていた中田先生の顔面に当たった。

「やべっ……」

「どうする？　雄貴……」

「逃げるか……」

僕と雄貴は、後ろを向き、そのままダッシュ！　――――しようとしたが、二人とも後ろから肩を捕まれて動けなかった。

「藤沢に枝川……掃除中になにをしていたんだ？」

「あ、あのっ、あのっ、えとっ……」

雄貴は、完全にテンパってて使いものにならなくなってた。

かと言って僕も言い訳が浮かばない。

「掃除の時間は、野球をする時間ではないのは、分かってるよな？」

「「は、はい……」」

「分かってて野球をしたのか？」

「あ、でも、掃除終わってから野球やり始めたんですよ？」

雄貴が余分なことを言った。

さっき、なんで中田先生の顔面に雑巾が当たったのか忘れてるのかな。

「そうか枝川、お前の言う掃除というものは、ゴミが落ちている状態でも終わるんだな？」

「あ、え、あっ……その……」

やばい、いつにも増して中田先生が怖い。

なんでだ？　授業中、僕以外全員寝てても怒んないのに。

「とりあえず、今日の放課後、俺がいいって言うまで校内の掃除な」

「「えぇ～……」」

「なんだ？　文句でもあるのか？」

中田先生は、少し怖い笑みを浮かべて、僕と雄貴を交互に見た。

「「いえっ！　ぜひやらせて頂きます！」」

机上の三途の川

僕と雄貴は、地面に頭が着くんじゃないかというくらい深々と頭を下げた。

「じゃあ放課後、教室に残るように」

中田先生は、それだけ言うとどこかへ行ってしまった。

「なんで今日は、あんなに厳しいんだろう」

「さぁな、気分だろ」

僕と雄貴は、教室に戻るために振り向いた。
するとそこには、校長が立っていた。

「「あぁ〜、そういうことか」」

いつも優しい（もしくは適当な）中田先生があんなに怒るなんておかしいと思ったら、僕らの後ろに、この学校内での最高権力者的存在がいたとは。
それじゃあ、怒るしかないか。

「ぅおほぉん」

校長がわざとらしい咳をしたので

「雄貴！　放課後の掃除頑張ろうか！」

「そうだな！　学校中ピッカピカにしてやろうぜ！」
心にもないセリフを吐いていそいそと教室に戻った。

教室に戻り自分の席に着く。
ふと横の席が気になる。
奏が熱心になにかを書いていた。

「なに書いてんの？」

つい気になって聞いてみた。
すると、奏はビクッとして、書いてたものを隠しこっちを向いた。

「あれッ？　え、ちょちょちょちょッ！　い、いつからそこにいッ！？」

「えっと……ほんのちょっと前から。で、なに書いてたの？」

尋常じゃないくらいに動揺している奏は、なんだか面白かった。
腕をブンブン振ってなにかを隠そうとしていた。

「こっ、ここ、これはっ……えと、その……もうッ、なんだっていいでしょッ！」

そう言うと奏は、顔を真っ赤にして腕に顔を埋めた。
奏がなにを隠しているのか気になったが、このまま追求したら本当に怒られそうなので諦めることにした。

「ラブレターでも書いてたりして」
「ガラ」奏が椅子から立ち上がる音。
「くるっ」奏がこっちを向いた。
「ぐっ」奏が拳を握りしめた。
「ドゴッ」奏の拳が「ゴフッ！」僕の腹にめり込んだ。
「このデリカシー皆無のド天然アホスケ！」
な、なんで……。
僕は、放課後まで机上で三途の川を眺めていた。

「おい、起きろアホスケ」
「ん、ぅ～……ここはぁ……？」
目を開けると、そこには雄貴がいた。
「ここは二年四組の教室だ。ちなみに今は、放課後だ」
「奏は？」
「帰ったぜ。結構怒ってたなぁ」
やばいなぁ。なんで怒ってるのか全然分かんないけど。

「とりあえず掃除しようぜ。教室だけ掃除すりゃいいって中田先生が言ってたし」

「そうだね」

あとでしっかり謝っとかないとな。

なんでか分かんないにしろ、僕が悪いのは確かだから。

視点分裂

僕はホウキを取り床を掃きはじめた。
なんかホウキの形ってギターに似てるよな。

「真琴、ホウキを使ってギターの真似だけはやめてくれよ。また怒られっから」

「読むな！　僕の心を読むなぁッ！」

僕ってそんなに分かりやすいのかな……。
なんでこんなにスラスラと心を読まれるんだろうか。
考えてても仕方ないので真面目に掃除をすることにした。

「お、しっかりやってるな。偉い、偉い」

掃除を始めてから約３０分が過ぎたとき、教室に中田先生が現れた。

「そろそろ終わっていいぞ」

「ホントっすか？　あざっす」

雄貴は軽く挨拶をすると、ホウキを片付けた。
僕もそれに続いた。

「じゃ、帰ります。さようなら」
かばんを持ち、中田先生に軽く会釈をして、僕と雄貴は教室を出た。
さて
「奏に電話しよっと」
僕はケータイを取り出し、奏に電話をかけた。
もちろんさっきのことを謝るために。
プルルルル……。
プルルルル……。
『現在電話に出ることができません……』
「はぁ……」
ため息一つ。
今すぐに謝れないとなると、すごくモヤモヤしてきた。
もしかして怒ってて、わざと電話に出なかった？
うわぁー、そう考えたらなんか怖くなってきた。
どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう……。
「お、おい、真琴？」
どうしよう、どうしよう、どうしよう……。
完全に混乱して雄貴の声も届かなくなっていた。

〜音無奏視点〜

はぁ、真琴くん怒ってないかな……。
あのときは勢いで殴っちゃったからなぁ……。

「奏っ　ほら歌いなって」

愛ちゃんがマイクを渡してきた。
ちなみに今、あたしは同じクラスの豊田愛ちゃんとカラオケに来ている。
真琴くんとの一件の後、あたしは浮かない顔をしていたらしく、愛ちゃんが「悩みがあるなら声を出すのが一番！」と言って、連れてきてくれたのだ。

「ありがとね、愛ちゃん。思いっきり歌ってスッキリするよ」

「それが一番！」

あたしは曲を入れ、マイクを握り、歌う準備をした。

「えっ？　天球回転論って誰の曲？」

画面に映し出された曲名を見て、愛ちゃんは首を傾げた。

「コペルニクスだよ。この曲は真琴くんのおかげで知れた、あたしの一番好きな曲」

後で真琴くんに謝らなきゃな。

そのとき、あたしの気づかないところであたしのケータイは着信音を鳴らしていた。

〜藤沢真琴視点〜

「ねぇ、雄貴、どうしよう」

初体験の事態にうろたえる僕。

すれ違い電話

それを面白そうに見る雄貴。

「なに笑ってんのさ」

僕は若干涙目で雄貴を見た。

雄貴は笑いを隠そうとしたが隠しきれてなかった。

「はぁ……怒ってるだろうな……奏」

「真琴、そういうときは歌でも歌ってスッキリするのが一番だぜ」

雄貴が言った。

歌？　今そんな気分じゃ……。

「いいから行くぞ！」

雄貴は、僕の腕を引っ張り、どこかへ連れて行った。

着いたのは、近所にあるカラオケ店だった。

「二時間で」

雄貴は受付を素早く済まし、僕を引き連れ、１７号室へと向かった。

「ほれ、歌って元気出せ。スッキリするぜ。謝るのはそれからでも遅くないだろ？」

「うん、そうだね。じゃあ、天球回転論でも歌おうかな」

僕は一番好きな曲を熱唱した。

～音無奏視点～

あれ？　光ってる。着信？

あたしはケータイを開き、電話の相手を確認した。

不在着信　藤沢真琴

あ、真琴くん、電話してくれたんだ。

やっぱ、こっちから電話したほうがいいよね。

「愛ちゃん、ゴメンね。ちょっと電話してくる」

「いいよぉー、彼氏ぃ？」

「違うから！」

あたしは外に出て扉を閉めた。

扉には１６号室と刻まれている。

「真琴くん、電話出なかったから怒ってるかなぁ……」

手早く電話帳から”藤沢真琴”を見つけ出し電話をした。

プルルルル……。

プルルルル……。

『現在電話に出ることができません……』

やっぱり怒ってるのかな……。

どうしよう、どうしよう……。

「うわぁーん、愛ちゃん、どーしよおぉ」

部屋に飛び込み、愛ちゃんに抱き着いた。

「ぅおっ、どうしたよ奏。ん？　フラれたか？　フラれちゃったのか？」

ブンブンと首を横に振る。

「真琴くんが……真琴くんがぁ……」

「まことくん？　あ、藤沢くんか。藤沢くんがどうかしたの？」

あたしは途切れ途切れ、愛ちゃんに事情を説明した。

～藤沢真琴視点～

「ふぅ……なんかスッキリしたなぁ。やっぱり天球回転論っていい曲だなぁ」

僕は天球回転論を歌い終わり、烏龍茶を飲んでいた。

「ん？　真琴、ケータイ光ってるぞ」

雄貴に言われて、テーブルの上に置いてあったケータイを見た。

不在着信　音無奏

「やばっ、奏から電話来てた！　僕、ちょっと電話してくる」

「おう、そのままコクってこい」

「んなことするかぁッ！」

僕は部屋の外に出て、扉を閉める。

そのまま１７号室の前で電話をかけた。

隣の部屋

出ない……。
まさかチャンスは一度だけ？
そのチャンスに歌ってて気づかなかったのか？

「どうしよう……」

部屋に入ると、雄貴が歌っていた。
しかし、雄貴は僕の顔を見るなり歌うのをやめた。

「ダメだったか」

「うん……」

まさか、冗談で言ったあんな一言でこんな亀裂が入るほどの絆だったなんて。
僕が余計なこと言ったから悪いんだ。
奏は繊細なんだ。もっと考えて発言すればよかったんだ。

「ちょっとトイレ行ってくる」

頭を抱えている僕を横目に見ながら雄貴は部屋の外に出た。

～音無奏視点～

「確かに謝ったほうがいいかもね。むこうが悪いっちゃあ悪いんだけどね、その後の対応がね」

愛ちゃんは、優しい声で言った。

こんなに真剣に聞いてくれるなんて。

「とりあえず、明日にでも直接謝りな。大丈夫だって、真琴くん、優しいんでしょ？」

「うん……あんなに優しい言葉をかけてくれて、味方になってくれた人は、愛ちゃんと真琴くんだけだから……」

頼もしかった。

愛ちゃんも真琴くんも同じで、いつだって優しくて、いつだって頼もしかった。

そんな大切な存在に対して、あんな……ただの冗談に対して怒ったりして……うぅ。

「さーって、そろそろ時間だね、帰ろっか」

そう言うと、愛ちゃんは片付けをし、立ち上がった。

「ゴメンね、あんまり歌えなかったね」

「いいよいいよ、気にしない気にしない。藤沢くんと早く仲直り出来るといいね」

「うん、ありがとう！」

あたしと愛ちゃんは、１６号室を後にした。

帰り道、瀬戸川に立ち寄った。

「今年は暑くなるのが早いねぇ」

「そうだね」

二人は足を水に浸けていた。

水の中には、キラキラと光る魚が何匹も群れで泳いでいた。

「そういえばさ、奏はなにかを書いてたんだよね？　それで藤沢くんがラブレターって言ったんだよね？」

「え？　あっ、まぁそうだけど」

どうしたんだろう、突然。

ま、まさか、なにを書いてたか聞くんじゃ……

「なに書いてたの？」

やっぱり……。

～藤沢真琴視点～

雄貴、帰って来ないな。どうしたんだろう。
雄貴が出ていってから、まだ数分しか経っていないが、数十分にも感じる。
心細い……。

僕は扉を開け、外に出た。
無数の扉がある廊下をキョロキョロて見回した。
今日は、平日なのでお客があまりいない。
ほとんどの扉が開いている。
さっきまで人がいた１６号室も空っぽになっていた。

「あ、雄貴」

向き合った

廊下の端、トイレの扉が開き、雄貴が出てきた。

「もうすぐ時間だな、最後に思いっきり歌おうぜ」

部屋に帰ってくるなり、雄貴は曲を入れてマイクを持ち、もう一つのマイクを僕に渡してきた。

「さて、最後だ。大声出してスッキリしようぜ！」

「うん！」

今、瀬戸川に架かる勝草橋を通っている。

辺りは薄暗くなってきている。

「あ、すげぇ」

雄貴が立ち止まって橋の下を見ている。

気になって下を見てみるとそこには、橋の街灯の光を照り返しキラキラと光っていてキレイだった。

「天の川みたいだね」

真っ暗な中に浮かぶ光の筋は、まさに天の川のようだった。

「暇だでさ、下りて見てこうぜ」
「そうだね」
僕と雄貴は瀬戸川へと下りていった

〜音無奏視点〜
「すっかり暗くなったね」
「うん、そろそろ帰ろうか」
とは言ったものの、今あたしたちは川の反対側に来ている。
向こう側に渡らなけばならない。
「あれ？　誰かいる？」
愛ちゃんが川のこう側を指差した。

〜藤沢真琴視点〜
「あれ？　あっち側に誰かいねぇか？」
雄貴が川の向こう側を指差した。

確かに誰かいる。
二人……女子かな……。

「あれ？　真琴くんと雄貴くん？」

「あれ？　奏と豊田さん？」

両岸にいる四人がお互いの存在を認識するのは同時だった。
って、なんで奏がこんなところに！？

「えっ、ちょ、愛ちゃん？」

「えっ、ちょ、雄貴？」

いつのまにか、隣にいたはずの雄貴がいなくなっていた。
向こう側にいた豊田さんも消えたらしい。

「あ、あのさ、奏……」

あれは、雄貴の気遣いだ。
今、謝るしかない。

「な、なに？」

数秒の沈黙。
言葉が見つからない……。
えーいッ、言葉を探してどうする！
本当の気持ちを言葉にするんだ！
言葉を飾っちゃダメだ！

「さっき、ゴメンね。冗談のつもりだったんだ。やっぱり僕ってバカだからさ、余計なこととか言っちゃうことあるんだ」

奏は下を向いて聞いていた。
やっぱり怒ってるよね？

「それでもさ、奏はさ、大切な仲間っていうか、隣にいてほしいんだ。だから……あの、仲直りというか……」

そこまで言ったところで、奏がバッと顔を上げた。
涙目だった。
胸の前で左手を右手でギュッと掴み言った。

「あたしが悪いの！　冗談くらい笑ってればよかった！　なのに……なのに、うっ……うぇっ、ぐすっ」

「奏は悪くない、悪いのは僕だから」

織り姫と彦星

「ううん、違う。あたしが悪いの……あたしが……」

お互いに自分が悪いと言っているこの状況。
これって終わりがないんじゃ……。

「じゃあ、奏が悪い」

「うん……えっ？」

奏は、予想外の言葉に驚いていた。

「それで、僕も悪い。お互い様ってことでさ、水に流そうよ」

奏は、僕をジッと僕を見て、そして川へと視線を下ろした。
そして笑みを零した。

「川だからね。水に流すにはちょうどいいね」

よかった、笑ってくれた。
やっぱり、奏は笑ってるほうがいいや。

「そういえばさ、今日がなんの日か知ってる？」

今日？　今日がなんの日？
なんの日だ？
そもそも今日は何日だ？
えーっと……七月七日？

あ、そうか。

「今日、七夕か」

「そうだよ。織り姫と彦星が一年に一度会える日」

奏は、空と川を交互に見た。

「天の川を越えて……会える。別に織り姫と彦星でなくったって……そんな歌詞を作りたかった」

なんだ？

なにを言ってるんだ、奏は。

奏は、よく分からないことを言った後に、靴を脱ぎ川をバシャバシャと音を立てて渡って来た。

「えっ、ちょっ、奏！？」

「ちょっと待ってって、あっ」

後一歩というところで、奏はよろけて川にダイブしそうになった。

「よいしょっ」

僕は、そんな奏の右手を掴み、自分のもとへ引き寄せた。

「七夕だから無事に会えた。織り姫でも彦星でもないのにね」

そう言った奏の顔は笑顔で満ちていた。

そしてポケットから一枚の紙を取り出した。
「これがさっき書いてた紙。歌詞を書いたの」
僕は、紙を受け取り、読みはじめた。
「これいいよ！　奏らしくて！」
「そう……かなぁ」
照れた顔が月明かりに照らされた。
「えへへ」と少しマヌケに笑っていた。
「曲にしよ、これ」
「うん！」
夜の瀬戸川には、一筋の光の川と、二人の星が浮かんでいた。
「帰ろうか」
「そうだね」
今日は一つ足りないけれど、それでも二つの星は夜空に浮かぶどの星よりも、七月七日の主役の恒星二つよりも輝いていた。

ここでも二つ

～枝川雄貴視点～

今、俺は二重になっている堤防、通称”二重堤防”にいる。
川に真琴を置いて来た。
大丈夫だよな、あいつらなら。

「おやや？　枝川くんもあたしと同じことを考えていたようだね」
聞き覚えのある声に振り向くと、そこにはクラスメートで、さっきまで奏の横にいた人物が立っていた。

「おう、豊田じゃねぇか。どうやらそのようだな」

豊田愛、話し方は適当なところがあるが、見た目は大人っぽく、可愛いと言うよりも綺麗と言ったほうが相応しい人物。
正直に言おう。
俺のストライクゾーンのど真ん中を通過した。

「なんかあっち、いいムードだね」

「そうだな。自分らじゃ気づいてないみたいだが、無意識の内にお互い意識してんだろうな」

二人とも鈍感そうだし。
特に真琴。あいつは鈍いどころの問題じゃない。

「あっち長そうだからさ、あたしたちは先に帰ろうか」

「ん？　あ、そうだな」

まさかのイベント発生！
なんだこのゲーム的イベント。
ベタ過ぎだろ。
それでもだ、それでも俺は今、喜んでいる。
神様、ありがとう！　恩に着る！

「家まで送るぜ」

「へぇー、優しいじゃん。じゃあ、お願いしようかな」

二人は、暗くなった道を歩き出した。
二人の間は、やけに狭かった。

今年の七夕は、織り姫と彦星よりも幸せそうな四人が主役だったのかもしれない。

ここでも二つ（後書き）

今回は『三ツ星シリーズ』の続編第一話ということでいつもの三人には幸せなムードになってもらおうかと思い、こんな話にしました！新キャラの”豊田愛”は前作から出そうと思ってたんですけど、機会が無くて今回、出てきてもらいました！

そんなわけで『三ツ星シリーズ』をこれからもよろしくお願いします！

ライブのお誘い

「お願い！　ライブしよ！」

現在放課後、場所は二年四組の教室。
今、僕の前には豊田さんがいる。その横には、奏もいる。
豊田さんは、僕と雄貴に向かって頭を下げていた。

「ちょっと待って、豊田さん。ライブって、ライブ？」

「そう、ライブ！　前に君たち、放課後に渡り廊下のとこでライブしてたでしょ？」

なんで知ってるんだ？
疑問に思い、奏を見ると、ニコッとして頷いた。
あ、教えたんだ。

「それでさ、もう一度ライブをしてほしいわけだよ、あたしも加えて」

「まぁ、いいけど……て、ん？　豊田さんも加えて？」

「そう！」

豊田さんは笑顔満天で頷いた。
豊田さんも加えてライブってどういうことだろう。

「それはね、愛ちゃんの将来の夢が歌手だからだよ」

「え、そうなの？　って、なんで会話になってんだよ」

「そういわけで、君たちと一緒にライブをしたいってこと」

そういうことなんだ。

そういうことなら、僕は喜んで、一緒にライブするけど、雄貴はどう思ってるんだろう。

「俺も、喜んでやるぜ」

読むな！　僕の心は”見物料ただ”じゃないぞ！

立ち読み禁止だ！

「ありがとう、雄貴くん！」

「まぁ、いいってことよ」

なんで雄貴は、照れ顔になってんだ？

それに豊田さんも”雄貴くん”って呼んでいるし。

この前まで”枝川くん”だったのに、この二人になにが？

「じゃあ、いつにすっか」

照れと喜びの混ざった顔をした雄貴が言った。

なんだ雄貴、惚れたか？

ヒューヒュー……って今はそんなことといいか。

追求はまた後だ。今はとりあえずライブをいつにするかを考えないと。

「雄貴くんたちさ、今から新しい曲を……というか、あたしが作っ

た曲を演奏できるようになるまでに、どれくらいかかる？」

「んー……そうだなぁ……」

雄貴は考え混んだ。
ちなみに僕と奏も。
そして、それぞれに答えを出した。

「一週間」僕。
「一日」奏。
「二時間」雄貴。

「「いや無理だろ！」」僕と奏。

僕の一週間と奏の一日は妥当な時間だ。
しかし、雄貴の二時間は無理がある。
”春風スマイル”　”星屑”のときは自分たちで作ったから短時間で出来たけど、今回はそういうわけじゃない。

「出来る！　俺ならきっと！」

雄貴は自信満々だった。
僕と奏は、雄貴を心配の眼差しで見ていた。
そんなこと言って大丈夫かよ。

「じゃあさ、とりあえず全員が演奏出来るようになってから、日時は決めるってことでいい？」

豊田さんが言った。

親友の底力

「うん、それでいいよ」

とにかく演奏出来なきゃライブなど無理だ。
豊田さんの意見に反対の人はいなかった。

「じゃあ、これ、楽譜ね」

豊田さんは、三人に紙の束を渡した。
見てみると、それは豊田さんの言った通り楽譜だった。
まぁ今、嘘をつく理由なんかないから、当然のことなのだが。

「じゃあ、よろしくね」

豊田さんは、笑顔を浮かべ、右手を挙げた。

「任せとけって！」

そして、嬉しそうな雄貴。
いつもは心を読まれる側だが、今回は立場が逆みたいだな。

「うん！　雄貴くん、頼りにしてるよ！」

豊田さんは、それだけ言うと、長い黒髪を翻し去って行った。
雄貴は廊下を、ただぼーっと見ていた。

「これは……あれだよね……」

小さい声で奏に言った。
こんな曖昧な言葉だが、奏にはしっかりと伝わっていた。
「あれだね、惚れたね」
奏は、小さく可愛らしく「くふふふ」と笑いを零した。
「いやぁ、春だねぇ」
「もう夏なのにねぇ」
雄貴は二人の会話など耳も傾けずにポケーとしていた。

雄貴の部屋の中にギター、ベース、ドラムの音が響いている。
僕たち三人は、雄貴の家に来るなり、練習を始めた。
「すげぇ……」
「いつもと違う」
僕と奏が驚いた表情で見つめる先には、いつも以上に必死で練習をする雄貴がいる。
そして
「しゃあッ、出来たッ！」
「「えっ、ホントに！？」」

僕と奏は、同時に時計を見た。
練習を始めてから……約……二時間。
「ハッハッハァッ！！　これが俺の底力だッ！！」
手を腰にあて、天井を見上げて高笑いをしている親友が目の前にいる。
すげぇ、これが恋の力か……。
「あたしたちも頑張ろっ」
「そうだね、なるべく早く出来るようになろっと」
さっきは一週間って言ったけど
「やったー、出来るようになったぜぇッ！」
雄貴がこんなに頑張って、嬉しそうにしてるんだ。
「遅くても三日くらいかな」
僕だって本気になれば、それくらい出来る。
親友のためならそれくらい。
楽譜を貰ってから、太陽が三回、西から東へ沈み、昇るのも四回目

の今日。
豊田さん作の曲を弾けるようにしたデルタスターズと豊田さんは、放課後の音楽室にいる。
理由は簡単、ライブに向けて合同練習である。

「じゃあ”雨空”合わせようぜ」

スティックをクルクル回して、上機嫌のドラマーが言った。
ちなみに”雨空(あまぞら)”とは、豊田さん作の曲の名前である。

読心術とキャラ崩壊

「雄貴くん、本当に二時間で出来るようにしてくれたんだね！　ありがとう！」

雄貴の元へ駆け寄る豊田さん。
照れる雄貴。
いやぁ～、見てて飽きないというか、面白いねぇ。

「藤沢くんも奏もありがとね」

振り向いて、僕と奏に微笑んだ。
うん、確かに大人っぽい。
雄貴、いい趣味してるよ。

僕が視線を向けても、雄貴は豊田さんから目を離さなかった。

はぁ、片想いで終わったらショック大きいんじゃないの？
こういうのはね、熱くなりすぎると片想いで終了するのがオチだよ？

「そんなことないんじゃない？　雄貴くんの想いは、きっと愛ちゃんに伝わるよ」

「そうかなぁ、って待って！　今、究極的な読心術を披露した！？
えっ、ちょっ、なんで！？　なんで会話に！？」

「なんでって、真琴くんの心を読むくらい造作もないんだよ」

僕ってそんなに単純なのかなぁ……表情に出るのかなぁ……。

でもなんか嬉しい気が……。

ぐわぁっはぁーッ！！　意味分からん！！

「ふふっ、真琴くん可愛い」

「可愛くなぁーいッ！」

もうなにがなんだか分からなくなっていた。
そんな中、僕にとっては救いの声が聞こえた。

「なんか雑談になっちゃってたね、じゃあ、合わせようか」

さっきまで雄貴と話していた相手、豊田さんが言った。
それに同調するように雄貴も

「よし、やろうぜ！」

と。
よかった、ようやく”投げてもいないボールを捕られるキャッチボール”が終わった。

僕と奏は、言葉のキャッチボールを止め、楽器を持ち、準備をした。

「じゃあ、準備はいいな？」

雄貴の問いに豊田さん、奏、そして僕は、無言で頷いた。

「行くぜ、ワン・ツー・スリー・フォー！」

四人の演奏は、音楽室の扉を越え、誰もいない廊下にも響いていた。

「なんか、こうして全員で合わせると、迫力とか伝わり方が違うな」

「そうだねぇ、やっぱり君たちに頼んでよかったよ。奏は天才的だし雄貴くんは楽しそうに叩くし！」

奏はニコニコ、雄貴は照れ照れしていた。

雄貴……キャラ壊れてるよ……。

「藤沢くんも、始めて合わせるのに、あたしの声にハモらせるの上手いね」

「そう？　ありがとう」

今回、僕の仕事はギターとコーラスだ。

サポートに回るってのもいいな。

「豊田もさ、歌上手いよな。声キレイだし、それに曲もいいし」

すかさず雄貴が豊田さんを褒めた。

これを期に好感度アップ！　を狙っているのだろうか。

どちらにしろ、雄貴が真剣なのは分かった。

一人しか気づかない

「ありがとう、雄貴くん」

豊田さんもまんざらでもなさそうだ。

べつに雄貴からの一方通行ってわけでもないんだな。

「ささっ、もう一回合わせたら計画立てようよ」

僕はギター、奏はベース、雄貴はスティック、豊田さんはマイクを構えた。

「いいか？　ワン・ツー・スリー・フォー」

廊下に一つの曲が響き渡った。

「じゃあ、明後日の放課後でいいね？」

豊田さんの問いに、それぞれに返事をする。

ちなみに今は、渡り廊下ライブの計画を立てている最中である。

「ねぇねぇねぇねぇ」

黙っていた奏がやけに数の多い「ねぇ」を発した。

そんなに連発しなくても、みんな気づいてるよ。

「宣伝ってするの？」

わりと重要なことを言った。

「ねぇ」の数に値するくらい重要なことを言った。

「宣伝はしなくていいだろ」

雄貴は、あっさりと答えた。

しなくていいの？

「あの渡り廊下って放課後になると結構、暇人が集まるんだよ。この前やったときは偶然、誰もいなかったけど」

「そうなんだ、じゃあ宣伝はいらないね」

宣伝は、しなくていいことになった。

ほかに決めることはあるだろうか。

全員「もうねぇな」という空気に移行しようとしていた。

「はいはいはいはい！」

そんな中、またしても奏が多過ぎるくらいの「はい」を放った。

ちなみに、今回は手も挙げている。

大丈夫だよ、そんなに頑張らなくても気づいてるから。

「曲順どうする？」

おぉ、結構重要なことを。

と、言うより重要なことを決める前に「もうねぇな」という空気になりつつあった僕らがおかしいのか。

「曲順かぁ……どうする？」

全員の顔を順番に見ながら聞く雄貴。

「僕たちが先に”星屑”を演奏して、そんでその後に豊田さんも加わって”雨空”でいいんじゃない？」

「そうだな。豊田はそれでいいか？」

「うん、いいよ！」

よし、これでこの問題は解決かな。

あと、しなくちゃいけないことが一つあるだけだ。

その一つとは

「さて、中田先生のところに行くか」

渡り廊下の使用許可を貰うことである。

「「「「しつれいしまーす」」」」

四人は職員室へと足を踏み入れた。

職員室には、スーツ、私服、白衣と、それぞれに違う服装をしている先生たちが沢山いる。

みんな同じ制服を着ている生徒とは違い、特定の人物を探し出すの

が簡単である。
ちなみに僕らが探している人物は、水色っぽいワイシャツの上にクリーム色のベストを着ていて、ズボンは紺色、という格好をしている。

恋愛相談じゃないですよ

若くて、生徒からの人気や信頼もある、世界史の教師であり、僕ら四人の担任。

「中田先生、ちょっとお願いしたいことがあります」

雄貴は慣れない敬語を駆使し、中田先生に話しかけた。

「どうしたんだ？　四人で来るなんて」

「実はです「あー、分かった分かった、言わんでもいい」……はぁ？」

雄貴が話しているところに、なぜか「分かったぜ」といった表情をした中田先生が割り込んできた。

「分かったぞ、あれだろ。三角関係ならぬ四角関係だな！　仲のよい友達だったのに、恋愛感情のせいで関係がめちゃくちゃに！　みたいな相談だろ」

中田先生の予想を聞き終わった四人は、ここが職員室だということを忘れていた。

「「「「全然違うわぁッ！！」」」」

四人の心からの叫びは職員室に響き渡った。

その声に職員室にいたほとんどの先生が肩をビクッとさせて驚いていた。

「す、すまん……冗談だ、冗談」

中田先生も冗談に対して、こんなにマジな反応を示すとは思っていなかったらしく、少し反省していた。

生徒をからかうのも大概にしてくださいよ。

「本当はこうだろ？　豊田と藤沢たち三人のバンドでライブをしたいから渡り廊下の使用許可が欲しい、だな」

なんでノーヒントで分かったんだよッ！

前にもこんなことあったけど、この人は何者！？

「は、はい、よく分かりましたね。そういうことなんで許可ください」

あえてツッコまずに敬語で話す雄貴。

面倒臭いことを避けた、いい判断だと思う。

「よし、いいだろう。いつ使いたい？　明後日か？」

「は、はい、そうです」

いや、だからなんで分かるんだよッ！

予知能力者か、アンタはッ！

「じゃあ、校長には言っておいてやるから。あ、そうだ、今度からはいちいち許可を取らなくても使えるようにしといてやるよ」

そして、なんでこの人、こんなに若いのに、そんなに権力があるんだ？

疑問には思ったけど、自分たちに都合がいいことには変わりないので誰ひとりツッコまず、ただ「ありがとうございます」としか言えなかった。

ひとまず、しなければいけないことを全て終えた僕たち四人は、支度をして帰ることにした。

放課後の自分たち以外に誰もいない廊下を並んで歩く四人は、少しソワソワしていた。

「ついに明後日かぁ、緊張するね」

そう言った豊田さんは窓の外を見ながら歩いていた。

「そうだねぇ、愛ちゃんはカラオケ以外で人前で歌うの始めてだもんね」

奏が優しい声で、そう言った。

いつもどおり、いつもと違う

僕と雄貴は、隣を歩く女子二人を見ていた。
夕焼けを背景に頬を赤く染める二人は楽しそうに笑っていた。

「なぁ真琴ぉ」

雄貴は小さい声で僕の名を呼んだ。

「明後日さ、絶対に成功させようぜ」

ほかの二人には聞こえないくらいの小さな声だったが、僕にはハッキリと聞こえた。

なにを当たり前なことを言っているんだ。

「咲かせるんだろ？　笑顔」

僕の言葉に対し、雄貴は笑顔を見せた。

《”明後日ライブやる”と言ったら、”明日”事件が起こる》
よくある話だよね。

「おはよう、真琴くん」

「うん、おはよう」

しかーし、そんなのは現実では、あまりないことである。
まだ朝なのに、なんでそんなこと言えるのかって？
そんなの簡単だ。
今、奏と交わした「おはよう」は、放課後の廊下を四人で歩いたあの日から数えて二回目の「おはよう」だからだ。
つまり今日は
「今日、ライブ頑張ろうね」
「うん」
ライブの日。
昨日は本当に、何事もなく過ぎ去った。
朝から放課後までは、ボケーッと退屈な授業を流し、放課後は四人で練習、そして帰宅。
どうです？　なにもないでしょう？
って、僕は誰に話してるんだ？
「はぁ……緊張してんだな……」
「なに、真琴くん緊張してんの？　情けないなぁ」
「じゃあ、奏は緊張してないとでも？」
「もちろんだよ、あたしは変わったのだよ」

ふんっ、と鼻を鳴らして胸を張った。
ふーん、変わったから緊張してない……か。
って、ん？
僕の目線は奏の足元。
「奏、上履きどうしたの？」
「えっ、あっ、えっ？」
奏は自分の足元を確認した。
いつもなら履いているはずの上履きがなかった。
「はわわわわぁ……」
徐々に顔が赤くなっていった。
ははっ、やっぱり緊張してんじゃん。
僕は廊下へと走っていく奏の後ろ姿を見ていて、少し緊張がほぐれた。
「なーに、ニヤケてんだ？」
「ほぇっ？　あ、雄貴か。ってニヤケてないし」
いつのまにか親友が後ろに立っていた。
「そんなこたぁ、どうでもいい。いよいよ今日だな」
「そうだね、豊田さんのためにも、僕たち自身のためにも全力でや

ろう」

「おう！」

雄貴は拳を前に突き出した。
僕は、その拳に自分の拳をぶつけた。

今は、六時間目の授業中である。
授業内容は世界史。
いつもの如く、教室にいるほぼ全員が机に突っ伏している。
もちろん僕は起きている。

「起きてるのは……枝川だけか」

やっぱり違う

えっ？　雄貴が起きてる？
そんな馬鹿な。
授業中に起きてることなど、ほとんどない雄貴が起きてるだと？
って「起きてるのは……枝川だけか」ぁ？

「僕だって起きてますよッ！」

「え？　藤沢、さっき寝てなかったか？」

「一秒も寝てませんッ！　授業中、睡眠時間ゼロですッ！」

失礼な！　というか絶対わざとだろ！
前にもこんなことあったぞ！

「すまん、すまん。じゃあ、枝川と藤沢だけか。これじゃ授業にならんな」

確かにそうだな。
二人だけしか起きてないんじゃ授業どころじゃないな。
しかし、二年四組の七不思議には、こんなものがある。

《中田先生の授業は寝てても頭に入る》

なんでかは分からないが、この二年四組の生徒は世界史の成績が学年の中でもずば抜けている。
ちなみに二年生で中田先生に世界史を教わってるのは二年四組だけである。

「とりあえず授業続けてください。先生がしゃべってるだけでも、みんな覚えますから」

「そうか？　んー、そうだな。こいつら、いっつも寝てんのにテストの点だけは学年トップクラスだからな」

本当に不思議なクラス……と、言うよりは不思議で優秀な教師だな、この人は。
それにしても

「なんで雄貴、起きてんの？」

ぼやーっと窓の外を眺めていた雄貴に言った。

「ん？　あ、あぁ、なんか寝られなくてな」

「そうか、まぁ仕方ないね」

「おい、お前ら、授業中に教師の前でその会話は、どうかと思うぞ？」

あ、確かにそうだ。
普通の先生なら激怒してるだろうけど、やっぱり中田先生は器が違う。
テキトーなだけかもしれないが。

まぁ、とにかく世界史の授業中に窓の外を眺めながら溜め息をついている雄貴など、あまり見ていたいものではないということだ。
人とは恋をすると、こんなにも変わるものなのだろうか。

僕には、さっぱり分からない。

「はぁ……」

誰か僕の親友を元に戻してくれぇーッ！

僕は世界史の残り時間を目一杯に使って考えた。
なにを考えたかって？　それはね、雄貴がどうしたら元に戻るかだよ。
え？　授業中に考えることじゃない？
知らないよ、そんなこと。

まぁ、とりあえず結論は出た。
僕は、その結論を雄貴に言ってみた。

「告白しちゃいなよ」

モヤモヤが晴れると思うよ。
でも、あれか。
そんな簡単なことじゃないよな、告白って。

「よし、今日のライブが終わったら告る」

「はあぁぁあッ！？」

つい驚いてしまった。
なんて男だこいつは。

渡り廊下にて

「こういうモヤモヤモヤしてんの嫌いなんだよ！　いっそのこと盛大にフラれてきてやらぁ！」

「おおッ！　頑張れよッ！」

僕と雄貴は、ホウキを持ちながら、熱くなっていた。

現在、掃除中。

放課後まで、あと３０分。

３０分というのは意外と早いもので現在、放課後。

僕たちは、屋根のない渡り廊下で、ライブの準備をしていた。

今、渡り廊下には僕たちを除いて六人の人がいる。

六人とも「なにが始まるんだ？」と、ハテナを頭上で踊らせていた。

「さて、こんなもんだろ」

「そうだね、あとはギターをアンプに繋いで……って、あれ？　……あぁッ！」

僕は、とんでもないミスを犯した。

「どうしたんだ？」

「ギター、音楽室に忘れた」
「早く取ってこーいッ！」
「はいぃッ！」
僕は、廊下を全力疾走で駆け抜けた。
そして
「ハァッ……ハァッ……持って来ました……」
「お、速かったな」
そりゃそうだよ。
あれだけ全力で走ったんだ。
速いに決まってる。
「じゃあ、さっそく始めっか」
雄貴はマイクの電源を入れて、僕に渡した。
「ち、ちょっと……タンマ……少し……休憩……させて……」
全力疾走したあとに、全力で歌うなんて……無理！
「仕方ねぇなぁ。5分だけな」
「ありがとう」

「真琴くん、ゆっくり休んでね。観客は、あたしが引き付けておくから」

「ありがとね、奏」

奏は「いえいえ」と言って観客の前に行った。
そして、ベースを弾きはじめた。

普段学校ではおとなしい、音無奏のプロ顔負けのベース演奏に観客はすっかりと引き込まれていた。
正直に言うと、僕も見入ってしまった。

ちなみに雄貴は、出番まで隅っこのベンチで座ってる予定の豊田さんに、事情を説明しに行ってた。

「よし！　奏、ありがとう、もう大丈夫！」

すっかりと息も整い、準備万端になった僕は、天才ベーシストに声をかけ、そのあと、雄貴を呼んだ。

「じゃあ、今度こそ演奏始めっぞ！」

「「おお！」」

僕はマイクを取り、観客（一人増えて七人）に向き直った。

『はい、じゃあ皆さん、お待たせしました。これより、デルタスターズの渡り廊下ライブを始めます！』

観客が、ざわざわとしていたが、そんなことなど気にせずに、星屑を響かせた。

――両手を伸ばして
星を捕まえようとした――

「スゲー！　藤沢歌うまっ！」

演奏し終わった途端に声援の雨が降ってきた。
人数は少なくても、その声援が嬉しかった！

歌姫の心

『ありがとう、そう言ってもらえると全力で演奏してよかったと思う。じゃあ、今度は二年四組の歌姫の登場です！』

僕の呼び声とともに、二年四組の歌姫こと豊田愛が、僕の横に歩いてきた。

「歌姫は言い過ぎだよ」

「まぁまぁ、気にしない気にしない」

僕はマイクを豊田さんに渡して後ろに下がった。
僕の役目はギターとコーラスだ。

『じゃあ、歌います、聞いてください。”雨空”』

歪みのないギターの音が空に響いた。

『曇った窓をなぞってみても
空は曇ったままで
濡れた目を拭ってみても
雨は降ったままで――♪』

豊田さんの綺麗な声がメロディーに乗り、歌となる。

『泣いた後に笑ってみても
心は悲しいままで
涙隠すため笑ってみても

もっと悲しくなって――♪』

ギターもベースもドラムもボーカルも、みんな違うことを考えているのに、全く同じ曲を演奏できる。
バンドって不思議だし、なにより楽しい。

幸せそうに、楽しそうに演奏する四人は、このとき、まだ気づいていなかった。

『降り続く雨はこれまで
溜まってきた悲しみを
流してくれないかな――♪』

観客の表情が少し曇っていることに。

ギターの和音を最後に、演奏が終了した。
四人は満足そうに笑顔を見せていた。
しかし、観客のほうから、こんな声が聞こえた。

「なんか、豊田の歌、微妙だったな」

「だな。藤沢と比べるとスゲー下手じゃね？」

僕、雄貴、奏の顔がひきつった。
そして、三人の目線の先にいるのは

「……」

もちろん豊田さんだ。
無言で無表情なのに、悲しくて悔しいのが伝わってくる。

「あ、愛ちゃん、待って！」

豊田さんがドアに向かって走り出した。
奏が制止しようとしたが、遅かった。

パアァァンッ！！

豊田さんがドアノブに手をかけた瞬間に、渇いた音が響いた。
びっくりした全員は、すぐに音のした方向を向いた。
そこには、ドラムのスティックを振り下ろしたままの格好の雄貴がいた。
渇いた音は、シンバルを思い切り叩いた音だった。

「おい、お前らぁッ！　よく、本人の前でそんなことが言えるなッ！」

雄貴は、強い視線を観客にぶつけた。
観客たちは雄貴の迫力に、一歩下がったが、一人だけ言い返す者がいた。

「下手なやつに下手って言ってなにが悪いッ！　教えてやったほうが本人のためだろッ！」

言い返した人も、雄貴に負けず劣らず、迫力があった。

情けないけど、僕にはどうすることも出来ない。

雄貴に任せることしか。

綺麗な泣き顔

「悪いに決まってんだろッ！　一生懸命頑張ってるやつに、そんなこと言っていいわけねぇだろッ！」

「頑張ってたって、下手なもんは下手だろ！？」

「違う！　そもそも下手とかそういう問題じゃねぇんだ。歌ってのは、自分の気持ちをどれだけ乗せて、どれだけ伝えられるかが問題なんだよ。今の豊田の歌は気持ちの乗った最高の歌だった！」

さすがに、言い返さなかった。

雄貴の言葉で気づいたのか、それとも、なにを言っても意味がないと思ったのか。

どちらにしろ、その場にいる全員が俯いた。

「あ、愛ちゃん！」

豊田さんが、渡り廊下から飛び出した。

校舎の中へ消えていく。

奏は「あたし行ってくる」と言って豊田さんを追いかけた。

「悪かったな、きつく言っちまって」

雄貴は、俯いていた観客の一人に言った。

言われたほうも「いや、俺が悪かった」と言って、謝った。

僕と雄貴は、楽器をそのままにして、豊田さんと奏の後を追った。

奏から電話が来て、二人は屋上にいる、ということを知った。
今、屋上へ向かう階段を登っている。
横を歩く雄貴の表情は怒りというよりも悔しさが勝っているようだった。

「屋上ついたらさ、声かけてやれよ」

「ああ、分かってる。なんて言ったらいいかなんて分かんないけど、豊田の顔を見て、最初に思ったことを言う」

悔しそうな顔をしていたが、その目には、なにか強い光が宿っていた。

「うん、言葉は飾らないのが一番だから」

僕は、そう言いながらドアの前に立ち、ドアノブを回した。

ドアを開けると、そこには、短い髪と長い髪、二人の女の子の後ろ姿が目の前にあった。

「よっ、豊田」

雄貴が右手を挙げて二人に近づいた。
僕もそれに続く。

「ぐすっ……雄貴くん……？」

泣き顔を雄貴に向ける豊田さん。

雄貴は、豊田さんになんて言うんだろう。
慰めるのか、それともおどけて笑わせようとするのか。
どちらにしろ難しいだろう。
僕が同じ立場だったらどうしただろうか。

僕がそんなことを考えているうちに、雄貴は言うことを決め、口を開いていた。

「やけに綺麗な泣き顔じゃねぇか」

雄貴は笑顔で言った。

って、悔しくて泣いてる人に向かって、そんなこと言っていいの？
しかも笑顔で。

豊田さんも「え？」と声を漏らし、涙目を丸くして雄貴を見ていた。

「泣きたいときに泣けないほど悲しいことなんかないんだぜ。俺は、ずっとそう思って生きてきたんだ。涙は我慢なくたっていいんだよ」

精一杯の告白

「でも、あれくらいのことで逃げ出して、泣いて、みんなに迷惑をかけて……情けないよ、あたし」

拭っても拭っても、豊田さんの目からは涙が溢れていた。

「あれくらいのことって……あれだけのことをされたら、誰だって悲しいだろ？　悔しいだろ？　泣いたっていいさ」

「でも、でも……」

どうしても自分を責める豊田さんに僕と奏は、なにも言うことが出来なかった。

雄貴に任せるしか出来なかった。

「豊田さ、自分で作った曲の歌詞、忘れちまったのか？　それもサビの部分」

豊田さんの作った曲、”雨空”のサビ。

あ、そういうことか。

「強くなれるんだろ？　今、お前が流してる涙だって意味があるんだろ？」

豊田さんは、少し驚いた顔をして、そのあと、泣き顔に笑顔を混ぜて頷いた。

「あたし、もっと強くなる！　強くなって、もっと歌も上手くなっ

て、絶対に夢を諦めない！」

涙目には強い決意が映っていた。
強い心を持ってる人ってのは、どうしてこんなにも輝くのだろうか。
涙目なのに、とてもいい笑顔をしている。

「雨上がりの晴れ空は、いつもよりも綺麗なんだ」

雄貴は、そう言うと、すぐに振り返り「さーて、楽器片付けに行くぞ」と言いながらドアのほうへと歩いて言った。

ふふふ、僕には見えたよ。
振り向き際の雄貴の顔が赤かったのがね。

僕は、雄貴の横に行き、小さい声で

「恥ずかしかったら言わなきゃいいのに」

と言った。

「うるせぇ、気づいたら言ってたんだよ」

雄貴の顔は真っ赤だった。

「雄貴、顔が道端に落ちたザクロみたいだよ」

「嫌な表現すんなよ」

「ははっ、雄貴からの借り物だよ」

僕と雄貴は、笑いながら屋上をあとにした。
そして、それに続いて奏と豊田さんも屋上から去った。

四人は、渡り廊下に戻ってくると同時に驚いていた。
すっかりと赤くなった空に照らされている僕らの楽器の横には、さっきまで僕らの演奏を聞き、そして豊田さんに下手だと言い、さらには雄貴と言い争いをした観客たちが、そっくりそのまま七人残っていたのだ。

「どうしたんだ？　お前ら」

まず、雄貴が前に出て言った。
この質問に答えたのは、雄貴と言い争いをした、あの人。

「ライブっつったらアンコールが付き物だろ？　んで、アンコールするために待ってたってわけだ」

なんでこの人、こんなに偉そうなんだろう。
まぁ、そんなことはどうだっていい。

「どうする？　雄貴」

アンコールに応えるのか応えないのか。

自分へのメッセージ

雄貴は、口をニイッと吊り上げて、僕、奏、豊田さんの順番に見た。

「やるに決まってんだろ！　なぁ？　お前ら！」

「「あったりまえだー！」」

僕と奏はノリノリで返事をしたが、豊田さんは、ノリ切れてなかった。

さっきのこともあるが、なにより、僕たち三人のノリがまだ分かってないっとのがあるかな。

豊田さん。返事は元気よくだよ！

「曲は”雨空”でいいよな？」

雄貴が豊田さんにマイクを渡しながら言った。

一瞬戸惑った豊田さんだったが、大人っぽい長い黒髪を揺らしながら、力強くマイクを受けとった。

「よし、じゃあ、始めんぞ！　ワン・ツー・スリー・フォー！」

雄貴の掛け声で、バラバラの音が一つの曲となった。

『ひとつ　ひとつ落ちる雨粒に
悲しみ乗せて流せるのなら
涙なんていらないのに
ひとつ　ひとつ流す涙に

意味があるのなら
それを確かめて強くなれる――♪』
”雨空”のサビ。
豊田さんが自分に送るメッセージ。

演奏が終わると同時に、声援が降りかかった。
僕、雄貴、奏は笑顔で喜んでいた。
一方、豊田さんはというと――――

「君たち、お世辞じゃない？　お世辞じゃないね？　ありがとー！」

バッチリ笑顔だった。
観客全員と握手をしていた。
おーい、雄貴ー。そんなに羨ましそうに見てんなよー。

「でも、やっぱり、まだ下手だよな」

四人の笑顔を一言で曇らせたやつがいた。
さっき雄貴と言い争いをしたやつだ。
謝ったくせに、まだそんなこと言うのかよ。

「下手だけどさ、声も綺麗だし音痴ってわけでもないから、努力すればまだまだ伸びるだろうな」

そいつは、それだけ言うと、校舎内に消えてった。

「なんだあいつ、偉そうに」

「名前とか聞いときゃよかったね。上杉くんと同等のウザさだったね」

上杉くんと同等のウザさ、というのは、相当なものなのだが、あの人は本当にそれくらいウザかった。
そして偉そうだった。

「失礼だな、藤沢」

校舎の中から聞き覚えのある声がした。
僕の記憶だと、確かこの声の持ち主はウザくて捻くれ者で、僕と雄貴の野球部時代のチームメイト。

上杉紘だ。

「どうしたの上杉くん、またウザいことを言いに？」

「ちげぇよ。偶然通り掛かったら、お前らが演奏してたから」

「ふーん、そうなんだ」

「無関心だな」

「そんなことないよ」

僕と上杉くんは高速な言葉のキャッチボールを繰り広げた。

「まぁ、いい。とりあえず、いい演奏を聞かせてもらった礼にいい

ことを教えてやる」

無関心？　興味深々！

「「「「え、あ、いいよ、べつに」」」」

僕、雄貴、奏、豊田さんは、四人揃って無関心だった。

たいしていいことだとは思わないし。

「そんなに無関心！？　なんだよ……あいつのこと教えてやろうと思ったのに」

「「「「なに！？　じゃあ教えて！」」」」

「そんなに食いつくことか！？　まあ、いいや、まずあいつの名前は――――」

「「「「名前は？」」」」

このあと四人は、さっきまでいた偉そうでウザいあの観客の名前やら、いろいろ知ることとなる。

人違いじゃない？

「篠沢深月、それがあいつの名前だ」

上杉くんは四人の、ころころ変わる態度に戸惑いながらも、さっきまでいた、失礼極まりない観客の一人の名前を言った。

篠沢深月か。

なんだか女みたいな名前だな。

でもまぁ、深月を”みづき”じゃなくて”みつき”なだけいいか。

それで、名前を聞いた僕たちの反応はというと、

「へぇ～」「ほぉ～」「ふぅ～ん」「はぁ～」

べつに名前を知ったところで、どうってことはなかった。

「なんだよなんだよ聞いときながらその反応！　じゃあ、いいさ、これを聞いたらお前ら驚くぜ！」

本当に驚くのだろうか。

悪いけど、僕はちょっとのことじゃ驚かないよ。

「深月は、俺らのバンドのベース兼ボーカルだ」

「えぇ！？」

って、あれ？

驚いたの僕だけ？

みんな、べつに興味なしッ！　って顔してるし。

「真琴、なにをそんなに驚いてんだ？」

「いや、驚くでしょそりゃ」

「なんでだよ。篠沢の言動的に音楽に詳しいことは分かったし、上杉が篠沢のこと詳しいってことは、それなりに関わりがあるってのは予想出来るし」

それは僕も分かった。でも驚いた。そもそもだ、

「僕は、上杉くんがバンドをやっているという事実に驚いてるんだよ」

「あぁー、それか……ん？」

「そうだよ……ん？」

じばしの沈黙。

「「「そこぉッ！？」」」

雄貴、上杉くん、奏の三人は、なぜか驚いていた。

「俺、教えなかったけぇッ！？　この前！」

「え、えぇー……？　さぁ？」

全然覚えがない。

んー……全然分かんない。

「ところで、雄貴と奏は、いつ知ったの？」

この二人がいつ知ったのかを聞けば、僕も思い出すかもしれない。
そう思い、僕は二人に問いた。
すると、まず雄貴が、

「前に、上杉が突っ掛かってきたことがあったろ？　そのときに『お前らもバンドやってんのか？』って言ったんだ」

あー、そんなこともあったねぇ。
朝っぱらからウザったく突っ掛かってきたねぇ、ウザ杉くん。

「で、それが？」

「分かんないのかよ。お前”も”ってことは自分もやってるってことだろ？　俺はそのときに気づいたんだ」

「ふーん、じゃあ奏は？」

「あたしは、真琴くんに聞いたよ？」

んっ？　マコトクン？
どのマコトクンかな？

「そりゃあ、藤沢真琴くんだよ」

「人違いじゃないかな？」

「人違いじゃないです」

歌もベースも上手いらしい

全然覚えてない。
なぜ僕が奏と上杉くんの話なんぞしなければならない。
そりゃまぁ、仲直りもして、今のところは友達だけどさ、その人のことをわざわざ奏と話してどうする。
奏と話すなら、もっと楽しげで有意義な会話をするはずだ。
よっぽど機嫌でもよくない限り、奏と上杉くんの話などするはずがない。
もしかして、偶然にも機嫌のいい日があって、そのときに上杉くんの話題が出たのか？

「奏、それはちなみにいつの話？」

「えっとねぇ、確か山沢さんと瀬戸川に行った次の日かな」

山沢さんとは、コペルニクスというバンドのギターとボーカルを担当している山沢基貴さんのことである。
その人と瀬戸川に行った次の日といえば、なんかあったような……
……あ。

「思い出した」

そうだそうだ。完全に思い出した。
そういえばあったなぁ、機嫌がよくて上杉くんの話題が出そうな日が一日だけ。

「朝、キャッチボールしたときに聞いたんだ」

「そう、そう、そうだよ！　ようやく思い出したか」
どうやら、この記憶は生きていくうえで、あまり必要ないので、しまい込まれてたらしい。
ドンマイ上杉くん！
「で、なんの話してたんだっけ？」
「おいおい、深月の話だろ？　深月が俺と一緒にバンドやってるって話」
「あ、そうだった」
なんだろう、最近忘れっぽいけど……ま、いいや。
「その篠沢くんって、やけに偉そうだったけど、歌とか上手いの？　豊田さんに下手って言うくらいなんだから、さぞかしお上手なんでしょうね」
「ああ、歌もベースも、めちゃくちゃ上手いぞ」
ほぇー、歌もベースも上手いか。
うん、そうか。そんな人が僕の隣にもいる。
「どうせ歌もベースも上手いって言ったって、奏には勝てないでしょ」
僕の挑発的な発言に、若干表情を歪めた上杉君。それを見た雄貴が奇襲をかけた。

「そもそも、お前らのバンドって上手いのか？　なんか性格的に問題のあるやつらばっかり集まってるけど」

「なんだとーッ！　誰が性格歪んでんだッ！」

僕、雄貴、奏、豊田さんは同時に上杉君を指差した。

「んなッ、なんだとーッ！　よーし、分かった、俺たちの実力見せてやる！　勝負だッ！　バンド演奏で勝負だッ！」

怒る上杉君。そしてその言葉を待ってました！　といわんばかりの勢いで雄貴が、

「望むところだッ！」

と、嬉しそうな声。

視線がぶつかると火花が……

「お前らの歪んだ性格を叩き潰してやる！」

「やれるもんならやって見やがれ！」

と、今度は罵り合い。まったく、二人とも子供なんだから。

誰かが止めないとこの二人はいつまでも罵り合いをしていそうなので、「誰か止めてくれそうな人はぁ～」と、あたりを見回してみた。

現在、「この屋上にいるのは、罵り合ってる馬鹿二人と、「止めなくていいの？」とこちらを見ている可愛らしい二人。そして僕。

僕が止めるしかないじゃないか。

「ほら二人とも、落ち着いて落ち着いて」

二人の間に入って、罵り合いを止める。二人ともまだなにか言いたそうだ。

そんな二人にしゃべらせておくほど僕は甘くはない。

「決着は演奏でつける。分かったかな？　二人とも」

上杉くんと雄貴は、互いに視線を交差させると、黙って頷いた。

そして、また二人は視線をぶつけた。映像化したら火花でも散ってそうだな。

「さて、じゃあ俺は疾風の如く速さで帰って、あいつらに連絡すっかな」

視線のぶつかり合いの末、上杉くんが身を翻して扉へと向かって行

った。

「あ、上杉くん、時間と場所は二週間後、この渡り廊下でいいね？」

「ああ、楽しみにしてる」

上杉くんは、そう言うと、階段を下り、廊下を全力疾走で駆け抜けていった。

そして上杉くんの姿が見えなくなったころ、遠くから「こらぁッ、上杉ッ！　廊下を走るなッ！」「わあぁぁ、鬼ケ島先生、すみません！」「俺は鬼ケ島じゃない、鬼島だッ！」という会話（片方は怒鳴り声、片方は怯え声）が放課後の誰もいない校舎に響き渡った。

そんな上杉くんに同情することもなく、僕たちは、楽器を見た。

「さて、楽器を片付けよう」

「そうだね」

今日で、学校で演奏するのは一段落なので雄貴のドラムを持って帰らなくてはならない。

雄貴は、ニヤニヤしてこちらを見ていた。

「分かったよ、運ぶの手伝うよ」

親に頼んで車で運んでもらえばいいのに。

僕の下校は、重いギターと重くてデカイ、ドラムのせいで、いつもよりも過酷でつらいものとなり、いつも歩く道がいつもよりも長く感じる、という現象に襲われた。

僕と雄貴は、ある人の家に行ったことがない。
その人は、よく藤沢家と枝川家に訪れるのだが。

恥ずかしがりと抜け殻

そして、その人は、妙に恥ずかしがりなところがあり、なにかあると、すぐに頬を赤く染めたり、と可愛らしい一面と、抑えが効かなくなり、腹に拳を叩き込むという、恐ろしい一面を持つ。

「うぅ……本当に来るの？」

その人は、こんなことを言いながら、僕の横で短い髪を揺らして歩いている。

往生際の悪いこと、この上ないな。

「仕方ないじゃん、奏がベースと楽譜を家に忘れるから。それに今日、僕の家も雄貴の家も都合悪いし」

その人、こと音無奏は、恥ずかしそうに縮こまって歩いていた。

今日は、僕の腹に鉄拳が減り込むこともなく、奏は、ただただ顔を赤くしているだけだった。

というか、もう二度と僕の腹に奏の拳が減り込むことがないように願う。

「こんなに可愛くておとなしい人に、何回も殴られたくないからね」

「えっ？　なんか言った？」

「え、あ、ううん、なんにも」

ついつい言葉に出てしまっていた。

あ、そうそう、ちなみに今日、雄貴は欠席……というわけではない。

僕の横を歩いているのだが、どうも抜け殻のようだ。
話しかけても返事もない。
理由は分かっている。

昨日、雄貴は「告白する」と言ったのだ。言葉は違うかもしれないが、確かにこのような意味合いのことを言った。
もちろん、相手は豊田さん。
しかし、いざ告白となったら、この男、一言もしゃべれなくなったのだ。
結局、雄貴の精一杯の告白は、慰めた時の「綺麗な泣き顔だな」程度である。
今考えてみると、雄貴に似合わないキザな台詞だな。笑いがこみ上げてくる。
昨日の屋上でのムードで告白しちゃえば、ガラス玉のようにコロッと転がして落とせただろうに。

「やれやれ」

そんなわけで、自分の弱さを知った雄貴は、僕らの思いのほか落ち込んでいるのだ。

まったく、なんだって放課後に異常に恥ずかしがってる女子と抜け殻と化した男子に挟まれて下校しなければならんのだ。

「はぁ……家に着いたら誰もしゃべらなくなるんじゃないだろうか」

誰に言ったわけでもない、この言葉は、やはり誰の耳にもたどり着けず、僕の近くを漂っただけだった。

そして、無言で歩き続けた奏と僕と抜け殻とは、無事（？）音無家へとたどり着いた。
そしてたどり着くなり、奏が僕と雄貴の前に立ちはだかり「やっぱり真琴くんの家にしよ？　むしろ今日休みとか！」と。
どれだけ家に入られたくないのだろうか。
部屋が汚いのか？
大丈夫、大丈夫。僕と雄貴は、その程度じゃ驚かないさ。

「僕の家は、今日ダメなの。いいじゃん今日くらいさ。大丈夫だよ、部屋に物が散乱してようと驚かないからさ」

おじゃまします

「なによ、失礼ね。あたしの部屋は物が散乱したりなんかしてないッ！」

「そう、じゃあいいじゃん」

とりあえず、インターホンを押してみた。
ピーンポーンとわりと透き通っていて綺麗な音が家の中に響いた。

「なッ、真琴くん、それは反則だよッ！」

「へへーんだ、ルールがないから反則もないんだよー」

玄関先で僕と奏が、言葉でキャッチボールをしていると、音無家の玄関の扉が開いた。

「あら、奏じゃないの、おかえり……って、あら？　あらあらあらあら」

出て来たのは奏によく似た、若い（僕にはそう見えた）女性。
随分と綺麗な人だ。
そのわりに「あら」の言い方がおばさんっぽい。

「げっ、お母さん」

奏が、そう呟いた。
って、え？

「「お母さん！？」」

いやー、お約束な気もするけど、これはすごい。
驚いた。
どう見ても二十代にしか見えない。
あまりの出来事に、抜け殻まで驚いてた。

「どうも、奏の母です。いつも娘がお世話になってます」

「「い、いえいえ、こちらこそ……」」

ほ、本当に奏の母なんだ……。
驚き過ぎて雄貴が復活してるし。

「ささささ、あがってあがって。ゆっくりしてってくださいな」

「「はい、お言葉に甘えて」」

僕と雄貴は、そそくさと音無家に入り込んだ。

「ちょ、まっ、待って二人とも……うぅ」

奏もうなだれながら帰宅を果たした。

そして、僕と雄貴は案内されるがままに、奏の部屋に到着した。
部屋の中は、まったく散らかってなどおらず、綺麗に片付いていた。
そして、なにより

「なんか、奏らしい部屋だね」

言葉にはしづらいが、まぁ、とりあえず女の子らしい部屋である。
そんな部屋の中で、あるものを見つけた。
それは、僕や雄貴、豊田さんよりも奏と一緒にいて、奏を支えてきたパートナー的存在のベースだ。

「まったく、そんなベースを忘れるなんて、どういうつもりかねぇ、奏は」

「ゴメンなさい」

「謝るならベースにだよ。そんなことより聞かせてほしいことがたくさんあるんだけど」

「な、なに？　あ、曲？　新しい曲？　今、準備するから待って」

奏は、なにか焦ったような態度でベースを持とうとした。
しかし、僕は、それを制止した。

「それも聞きたいけど、まず聞きたいのは違うことだよ。ねぇ、雄貴」

「あぁ、まず聞きたいのは、あのことだ」

僕は、少し間を空けて、こう言った。

「奏のお母さんって二十代じゃな、いよね？」

僕がそう言うと、奏は俯きフルフルと震えていた。

あの子から見た二人

そして、ガバッと顔を上げると、こう叫んだ。

「そんなわけあるかーッ！」

と。

まぁ、当たり前である。

母二十代の娘十六歳は、不可能であろう。

「分かってる分かってる。あれはお母さんじゃなくてお姉さんなんだよね？」

「なんにも分かってないよ、真琴くん……」奏は、肩をガックリと落として「あたしには姉はいないよ」と言った。

「じゃあ、あれは……？」

「本当にあたしのお母さん」

世界には不思議なこともあるんだな。

雄貴と目と目で、信じ難い事実を確認しあった。

そんなことをしていると、部屋の外から「うふふふ」と嬉しそうな笑い声が聞こえた。

奏がハッとした表情で扉を開けるとそこには、奏の母がお茶が乗った盆を持って立っていた。

「あら、奏ちゃん。ちょうどよかった、はいお茶」

「お母さん、聞いてたの？」

「うん、全部。うふふ、わたしが二十代かぁ、真琴くんも雄貴くんも口が上手ねぇ」

奏のお母さんの照れ顔は、奏によく似ていた。
やっぱり親子なんだな、と改めて実感させられる。

「あ、奏ちゃん、冷蔵庫の横にカステラがあるから持ってきなさい」

「え、なんであたしが？」

「いいからいいから、行ってきなさい。お客さん相手になにも無しじゃ失礼でしょ？」

「うぅ、分かったよ」

奏が部屋を出ると、今の隙に、と言わんばかりに奏のお母さんが話し出した。

「君たち二人のことは、奏ちゃんからよく聞いてるわ」

そうなんだ。
悪いこと話してなければいいけど。

「真琴くんが天然でアホでデリカシーなし」

んなっ、なんてこと教えてるんだ。
雄貴が僕を見て笑っている。
こんにゃろぅ。

「雄貴くんが熱血で、後先考えなくて、愛ちゃんのことが好き」
僕の横で、雄貴が顔を真っ赤にして突っ立っている。
あぁ、あぁ、可哀相に。
収穫時期を遥かに過ぎたトマトみたいになってるよ。
「それで二人に共通することが優しくて頼りになる」
おお、僕たち頼りになるのか、意外だ。
自分でも知らんかった。
「君たちとバンドを始めてから、あの子、前より笑うようになったの。なにより、毎日楽しそうなの」
そうだったんだ。全然知らなかった。
僕と雄貴が奏になにかしてあげられたのであれば、それはよかった。
「だから、これからも奏ちゃんと一緒にいてあげて」
そんなこと、言われなくたって分かってる。
頼まれるようなことではないんだ。奏は僕らの仲間であって、なにより、もう友達なのだから。

あの笑顔は守りますよ

「任せといてください。僕と雄貴は、いつまでも奏の仲間で友達です。あの笑顔は守りますよ、絶対に守ってみせる」

僕がそう言うと、奏のお母さんは「あらあらあらあら、まぁまぁ、真琴くんったら」と、手を顔の前でブンブンと振りながら言った。こういうところがおばさんっぽい。

「本当に頼もしいわねぇ、さて、じゃあ、おばさんは退散するとしますかな」

奏のお母さんは、そう言うと、部屋を出た。

去り際に、僕の耳元で「あの子をよろしくね、ずっと」と言っていた。

僕は、さっきの言葉を絶対に嘘にしないと誓った。

そして、その直後、奏のお母さんと入れ替わりに奏が部屋に入ってきた。

まるで、部屋の外で入るタイミングを伺っていたかのように。

「ま、まさか、全部聞いてたとか？　まさかね、まさかそんなはずないよね？　ね？　ね？　……うわーッ恥ずかしいッ！　嘘でしょ、嘘だと言ってぇーッ！」

あんな、あんなマンガの主人公の言うようなベタで恥ずかしいセリフを本人に聞かれるなんてマヌケなこと、あってたまるかーッ！

奏もなにか言ってくれればいいのに、赤くなって俯いてるし。

「あの、真琴くん……」
ようやく、奏が口を開いた。
よし、なにか冗談を言ってくれ。笑い話にしてくれ。
「その……ありがとう」
「うわぁーッ！」
僕は、頭を抱えて叫んでいた。
嬉しい、嬉しいんだけど恥ずかしい。
そんな、そんな照れながら「ありがとう」なんて言われたら、恥ずかし過ぎるでしょ！
そこから、しばらくの間、沈黙が続いた。
奏は頬を赤くし、雄貴はニヤニヤ、僕は抜け殻になっていた。

「いつまで黙ってんだ！」
沈黙を破ったのは雄貴だった。
ちなみに三人は一時間ほど黙っていた。
「「だってぇ」」
「だってじゃない！　奏に問う。俺らがここに来た理由は？」
奏は口元に指をあてて、少し考えてから「なんだっけ？」と言い放

った。

「はぁ……忘れんなよ、新曲披露のためだろ？」

「あ、そうだった」

雄貴は「おいおい」と半分呆れていた。

「じゃあ、ちょっと待ってて、準備するから」

奏は、そう言うと机の上から紙の束を取り、数枚を僕と雄貴に渡した。その後、部屋のすみで待機していたベースを首からかけた。

「二曲あるから、とりあえず”キャッチボール”から聞いて」

言い終わると同時に、ベースのドッシリとした低音が部屋に響いた。この低音が、バンドを支え、曲の土台となるのだ。

レモンと砂糖を一緒に口に入れたよう

土台がしっかりしていれば、自然といいものが出来上がる。
このバンドを支えているのは、奏と言っても過言ではない。
そんな奏が一曲目”キャッチボール”のベースの弾き語りをし終えた。

「いいじゃん！　メロディーもいいし、なにより奏の歌声！　豊田さんとはまた違った綺麗な声」

「そうだな、もとの声がいいからな」

それを聞いた奏は、照れ笑いを浮かべていた。
この緩んだ笑顔を見ていると、なんだか和む。
僕は、奏を見ていて和みついでにあることを思いついた。

「提案なんだけどさ、今回、ボーカルは奏にしない？」

「おぉ、奇遇だな。俺も同じこと考えてた」

こんな近くに見方がいた。でも奏は同意をしていないらしい。首を横にぶんぶん振っている。

「やだやだやだ、だめだめだめ」

「なんで？」

「恥ずかしいから……」

奏は、小さい声でボソッと言った。
でも僕は引き下がらない。
「僕たちの前では平気なのに、ほかの人だとダメなの？」
必死に目で訴えながら首を縦に何度も振り下ろす。
「一回だけやってみよ？　大丈夫、奏なら。なにも一人で演奏するわけじゃないんだよ？」
そういうと、奏は、僕の顔と雄貴の顔を交互に見て頷いた。
「真琴くんと雄貴くんと一緒なら大丈夫」
「ありがとう。じゃあ、張り切って次の曲いってみよー！」
僕がそういうと、奏は、ベースを持ち直した。
「じゃあ、次の曲いくね。次は、七夕に作った曲です」
七夕に？　あー、そう言えば歌詞を作ったとかなんとか言ってたなぁ。
「じゃあ、演奏するね。”七月七日”」
低くて、安定感のある音が三人のいる部屋の中に響いた。

現在、音無奏の部屋には、なにやらおかしな空気が漂っていた。
奏が二曲目として演奏した曲”七月七日”は、恋愛曲のようだ……
というより恋愛曲だ。
なぜか、僕と雄貴は、レモンと砂糖を同時に口の中に入れたような
感覚に浸っていた。

「どう……かな？」

奏が感想を求めてくる。
感想か……この甘酸っぱい感覚をどう言葉で表現すればいいのだろ
うか。

「分からない」

「なにが！？　曲の意味が！？　そっか、ダメかぁ……」
なんて言えばいいのだろう。全然分からない。

「どうしたらいいんだ」

「そんなに深刻！？　自信作だったのに……」

「なんで会話になってんだ、お前ら……」

周りの声を遮断して言葉を探す僕。
僕の言葉を曲の感想だと勘違いする奏。
そんな二人を交互に見て呆れ顔の雄貴。
さて、この先どうなるのだろうか。

あの後こうなった。

「ありがとう、真琴くん！」

「いえいえ」

結局、僕が「あんまり恋愛曲って聞かないんだけど、この曲は好きだなぁ」と言ったら解決した。
ちなみに、レモンと砂糖を口の中に同時に入れたような感覚を言葉で表現するのは諦めた。
僕には無理だった。

「じゃあ、この二曲を演奏するということでいいな？」

雄貴が僕と奏に問う。
却下する理由など脳内のどこをどう探しても砂糖一粒程度も出てきそうにない。
奏も同じだったようで、二人は同時に頭を上下に動かした。

「じゃあ、ギターとドラムのパートを作ろうぜ」

「「おう！」」

こうしてデルタスターズの曲に、新たに二つ、曲が加わった。

一二三四五六

「なんだよ、こんなところに呼び出して」

なぜか喧嘩腰な雄貴が上杉くんに言い放った。

上杉くんも、そんなのは慣れっこなので、とくに怯えることもなく対応した。

「お前らにバンドメンバーを紹介しておこうかと思ってな」

上杉くんが言い終えると同時に、僕たち三人は、上杉くんに背を向けて帰る準備をした。

「くだらねぇことで呼ぶんじゃねぇよ」

「こっちだって忙しいんだよ」

「そんなことに構ってる暇はないの」

いつも通り、息ピッタリな三人は、それぞれに捨て台詞を吐き、帰ろうとしたが、

「まてまてまてーッ！　頼むから待ってくれーッ！」

全力で引き止められた。

「だのむがらじょうがいざぜでぐでよぉ～」

泣いててなに言ってるか全然分かんなかったけど、多分『頼むから

紹介させてくれよぉ〜』と言ったのだろう。
僕たちは、優しさではなく鬱陶しさから立ち止まった。

「はいはい、分かったからとっとと紹介しろ」

「おし！　心して聞け！」
切り替え早っ！　さっきまで流していた涙は汗だったのか！？

「まず、ギターが俺でベースとボーカルは深月だ」

「んなこと知ってる。とっとと、そこにいる新顔二人を紹介しろ」

「わ、分かったよ……じゃ、とりあえずこっちから……ドラム担当の”夢見進”だ」

上杉くんは、新顔二人のうち、右側にいた髪のさらさらした男子を指差して言った。
”夢見　進”って、なんだかアニメキャラみたいな名前だな。

「んで、こっちがリズムギター担当の”ひふみよ　いつむ”だ」

「「「ひふみよ　いつむ？」」」

なんだか珍しい名前だな。

「珍しい名前に驚いてるところ申し訳ないんだが、これを見たらもっと驚くぜ」

そう言って差し出したのは、一枚の紙だった。それには、こう書かれていた。

《一二三四　五六》

「はぁ？　なんだこりゃ」

「さぁ？　なんだろね」

「暗号？」

三人が頭上でハテナを踊らせていると、上杉くんが突然笑いだした。

「あ、壊れた」僕

「壊れたな」雄貴

「壊れたね」奏

「壊れてんな」篠沢くん

「ぶっ壊れたな」夢見くん

「うん、壊れたね」ひふみよくん

全員、上杉くんを心配の眼差しで見ていたが、それでも笑いを止めない上杉に対し、全員の見方が変わった。

「気持ち悪いな」雄貴

「うん、そうだね」僕

「なんだか、怖い」奏

「気持ち悪ぃな」篠沢くん

「怖いな」夢見くん

「なんだか不愉快だ」ひふみよくん

ひふみよいつむ

「そんな目で見んなよ！　仕方ねぇだろ、可笑しかったんだから！」

「なにが可笑しいってんだよ」

「だって、これを見て暗号って……プッ、クッ、ハッハッハ」

気色の悪い笑い声を響かせる上杉くんに対し、雄貴は、もう我慢ができなくなっていた。

「こんにゃろぉッ！　ぶっ飛ばしてやるッ！」

「まてまてまてッ！　こんなやつ殴る価値もない！」

息をフーフーと荒くして、今にも殴りかかりそうな雄貴。そしてそれを止めようとする僕。

その光景を見て、ようやく自分に迫りくる危険に気づいたのか、笑いやめて、話し出した。

「実はな、これは暗号じゃなくて人の名前がそのまま書かれてるんだ」

「はぁ？」

《一二三四　五六》が人の名前？

そんなことがあるはずがない。

「馬鹿にしやがって、こんにゃろぉッ！」

さすがの僕も我慢の限界だった。
上杉くんの背後に周り、チョークスリーパー！
「グエェッ！」
まるで豆鉄砲を喰らった鳩のような声を上げて、上杉くんは、渡り廊下のコンクリートに沈んだ。
「度が過ぎるとこうなるんだよ、ウザ杉くん」
「だ……から……本当に……名前……なん……だっ……て……」
この期に及んで、まだそんなことを。
「じゃあ、誰の名前だっていうのさ」
そう問うと、上杉くんは震えた指で《ひふみよ》くんを指差した。
その瞬間、僕、雄貴、奏の三人は、すべてを理解し、逆に今までなんで気づかなかったのか疑問に思った。
先入観というやつだろうか。
《ひふみよ　いつむ》
漢字で書くと
《一二三四　五六》
なのか！
「そ、そうなんだね……」
「マジかよ……」

「すごい名前……」

三人は、今まで見たり聞いたりした名前の中で、トップクラスの珍しくて、面白い名前に驚きを隠せなかった。
それにしても、彼の両親は、並々ならぬ遊び心の持ち主なのか、それとも冒険をしてみたのか。
いつのまにか、僕たち三人は同情の目で一二三四くんを見ていた。

「そんな目で見んなーッ！」

一二三四くんの叫びも虚しく、誰一人として同情の目をしまわなかった。

「ははは、悲惨な名前だろ？」

「紘まで！　このやろう」
「まぁまぁ、いいじゃねぇか。――――と、まぁこんな感じで、これが俺のバンド仲間だ」

上杉くんは、胸を張ってそう言った。どうやら、上杉くんはバンド内で雄貴的立場、つまりリーダー的存在らしい。

「このメンバーなら誰にも負けねぇ、もちろんお前らにだってな」

風を起こす者

上杉くんは、僕たちを指差し、そう言った。

「それはこっちのセリフだ。なめんじゃねぇぞ」

雄貴も自信満々だ。

「どちらにしろ、来週の水曜日にどっちが上か分かるんだ。楽しみに待ってるぜ」

上杉君はそう言うと、バンドメンバーを連れて帰ろうとしていた。それを僕が「あ、ちょっと待って」と止める。

「上杉くんたちのバンド名を聞いてないんだけど」

「ああ、そういやぁそうだな」

上杉くんは立ち止まって振り返った。

「俺たちのバンド名は”Ｇｕｓｔ　Ｂｏｙｓ”だ」

そういうと、今度こそ帰ろうとした。それをまた僕が止める。

「かっこよく帰らせてくれよ！」

「そうはいかない。バンド名の意味を教えてもらわなきゃ」

よく分からない単語があって意味が分からない。ここで教えてもら

わないと、しばらくの間『どんな少年たちなんだろう』と夜も眠れないほどに悩まされることになるかもしれない。

「Ｇｕｓｔは突風でＢｏｙｓは少年たちだ。俺たちが世の中に風を起こす。そういうい意味でつけたんだ。もういいか？」

「うん、いいよ」

三ツ星は、風を起こす者たちの背中が見えなくなるまで見ていた。

昼時のこと

現在、枝川家で練習中。
まだ、合わせられるレベルに達していないので、個人個人で練習している。
ちなみに、練習中の曲は”キャッチボール”と”七月七日”の二曲。
いずれもボーカルは奏である。
ベースボーカル対決なので。
しかし、ベースボーカル対決と言っても、僕と雄貴だって頑張らなければならない。当然だ。三人揃って頑張ってこそのバンドなんだから。
それにしても、今回、僕はいつも以上に頑張らなくてはいけないらしい。
今まで、ボーカルと掛け持ちということで、ギターパートを簡単なものにしていた。しかし、今回、僕はギターだけ。
奏の提案により、”キャッチボール”のギターパートが、今までの比にならないくらい難しく作った。
……いや、作られた、と言ったほうが正しいか。

「ねぇ奏ぇ、これ難し過ぎない？」

すがる思いで言ってはみたが、

「ううん、大丈夫！　真琴くんなら出来るよ！」

「はい……うぅ……」

応援されただけだった。

「ギターソロがあるなんて……」

《ギターソロ》とは、ギターがソロで演奏する部分である。名称そのまま。

んで、そのギターソロが難しいんだよ。

僕しか演奏してない部分ということは、失敗したらめちゃくちゃ目立つということだ。

「奏さん……厳しいです……」

僕は、わざと聞こえないように言った。

弱音は、これで最後！　よし、頑張るぞ！

「ははっ、真琴、頑張れよ！」

「その意気だよ、真琴くん！」

聞こえないように言っても無駄ということか……。

「よし！　頑張るぞ！」

心の中でなく、声に出し、聞こえるように言った。

僕が意気込んでから約二時間が経った。

あー、そうそう。今日は旗日で平日休みなので、朝から練習している。

だから、まだ１２時なのだ。

まぁ、僕たちからしたら「もう１２時」なのだが。

「お腹減ったね」

「そうだなぁ」

「どっかに食べに行く？」

「そうだなぁ」

ハッキリしろよ。

「そうだなぁ」じゃ、イエスかノーか分からん。

「……あのぉ……」

奏が小さい声で呼び、小さく手を挙げていたが、僕も雄貴も気づいていない。

「なぁ、雄貴ぃ、イエスかノーかハッキリしろよ」

「んー……そうだなぁ」

「……あのぉ……」

「ハッキリしろよー」

「どーすっかなぁ……」

「……あのぉ……ねぇ……」

二人とも奏の声と手には気づいていない。
さすがに我慢の限界だったのか、奏は、
「あのぉって言ってるでしょ！　聞いてよ、もう！」

昼時＋かご＝弁当

と。

「「……すみません……」」

なんで怒られたのかよくわかんなかったけど、怒られたことにはかわりないので、僕と雄貴は頭を下げて謝った。

「それで、なに？」

「ほぇ？」

マヌケな声を出す奏。

なんか用があったから呼んだんじゃないのかな。

「あ、そうだ……えっと……その……お昼……ね……」

お昼？　なにか食べたいものでもあるのかな？

「なにが食べたいの？」

「えーっと、あの……いや食べたいものがあるわけじゃ」

「じゃあなに？」

いつもは気の長く優しい僕も空腹時は気が短くなるんだよ。

僕を怒らせると怖いよ？

「こ……これ……」
ふと差し出された奏の手には、なにやら茶色の木の枝でできたかごのようなものが吊されていた。
「かご？」
「あほか、お前は」
雄貴に蹴られた。
なんでさ！　どう見ても《かご》じゃん！
雄貴には《かご》に見えないと？　じゃあなにに見えるのさ！
これは見る人によって姿が変わるかごなの！？
「ばーか、これはただの《かご》じゃねぇって言ってんだ」
「はぁ……？」
「じゃあ真琴、聞くが、《かご》とはなにをする道具か知ってるか？」
「そりゃあ、知ってるよ。中になにかを入れるものだよ」
馬鹿にすんな。
雄貴よりは常識くらい知ってますよ。
「じゃあ、このかごにはなにが入ってると思う？」
雄貴は奏の持っている《かご》を指差して言った。
奏は、なぜか照れている。

「んー……分かんない……」

その瞬間、明らかに雄貴と奏が「ダメだこいつ」って顔をした。
そして二人揃って「はぁー」と深いため息。

「そ、そんな反応しなくてもいいじゃん！」

泣きそう……。

「あぁ、もう仕方ない！　奏、もう正解発表してやれ」

「えっ！？　……うん……じゃあ……」

顔を赤らめてもじもじしている。

「これ……お弁当……作ってきたの」

ほぇ？

「お、べ、ん、と、う？」

べ、弁当を、作ってきた？

「ほ、ホントに！？」

「……うん」

奏は赤くなりながらもコクりと頷いた。
ここで僕の頭ん中に浮かぶ率直な疑問。

「なんで雄貴は中身が分かったの？」
透視？　盗撮？　ストーカー？
作るとこから見てた？
「はぁ？　お前、時間帯とさっきまでの会話の内容と奏の態度を思い出してみろ。すぐ分かるっつーの」
分かんねぇよ。
僕には探偵的スキルなど微塵もないんだよ。
「そんなことより、僕はお腹空いたよ」

黄色いバブルス〇イム

僕の言葉を聞いて呆れ顔の奏と雄貴。

「それに奏の作ってきたお弁当ってなら、なおさら早く食べたいな」

その一言で、奏は一気に嬉しそうな顔になっていった。

雄貴は、まだ呆れ顔。

と、ここで雄貴が小さな声で僕に耳打ち。

「あのな、マンガとかアニメでよくあるだろ」

なんの話をしておる？

「ヒロインの作る弁当は、めちゃくちゃマズイか毒劇物のどちらかだ」

！？　そう言うことか。

分かったよ、雄貴の言いたいことが。

でも、雄貴に一つ言うことがある。

「主人公には、それを食べて『おいしかった』と言う使命があるのだよ」

それを聞くなり、雄貴の表情が変わった。

どうやら感動しているようだ。

「お前は、紛れもない主人公だ」

「うん！」
僕は、どんなものがこのかごから出てこようと、全て　食べると決意した。
「じゃあ、食べようか」
「うん、じゃあ開けるね」
奏がカゴを開けた。
中から弁当箱のようなものが取り出された。
まともなもの出てこいまともなもの出てこいまともなもの出てこい……
僕は、心の中で同じ言葉を呪文のように唱えた。
「じゃん！」
奏が弁当箱のフタを開けた。
中身を確認した僕は、雄貴のほうを向いて、首を横に振った。
だって……だって見た目ヤバいもん。
スライムみたいなのとか真っ黒い塊とか入ってるよ。
いざ、こんなものが出てくると、どうしたらいいのか。
僕がうろたえていると、雄貴がちょんちょん、と肩をつついてきた。
（食えよ）
！？　雄貴の目を見ただけで言葉が伝わってきた。
どうやら人間は、人生の危機に直面すると、なにやら特別な能力が宿るらしい。
僕と雄貴は、しばらくの間、視線で言葉のキャッチボールが出来る

ようになった。

（無理だよ。だって黄色いバブルス〇イムみたいなのがいるんだよ）

（大丈夫、あれは卵焼きだ）

（卵焼きか……大丈夫じゃねーッ！）

そんなことをしていると、奏が顔を覗きこんできた。

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

もう一度、雄貴のほうを向いた。

（食わないと、奏が悲しむぞ、それでもいいのか？）

それはダメだ。奏は、わざわざ僕たちのために作ってくれたんだ。
悲しませるわけにはいかない。

（食べるよ！　僕は、奏を悲しませたりしない）

（さすが真琴だぜ！）

僕は、自分に大丈夫だと言い聞かせて、箸を持ち、弁当箱を見た。
そして黄色いバブルス〇イムを掴んで口に運んだ。

「んん！？」

夕暮れ時

「どっ、どうしたの？　もしかしてまずかった？」

こっ、これは……。

「め」

「「め？」」

奏と雄貴が僕の顔を覗き込む。

僕は、正直に感想を述べようと思う。

「めちゃくちゃ美味い」

「ほっ、ほほっ、本当にッ！？」

奏が顔を近づけてくる。って近い近い。

「本当に冗談抜きに美味しいよ。驚いた。こんなに美味しいなんて……」

見た目とのギャップがすごい。見た目は正直ヤバいのに、味は美味い。

「俺も食おっと」

「あ、僕も、もっと食べたい」

「ふふっ、たくさん食べて、頑張って練習してね」
三人は、思いのほか美味な黄色いバブルス〇イムやら真っ黒な塊やらで腹を満たした。

「さーって、練習すっか」
雄貴が長ぁーく背伸びをする。
腹を満たした三人は、それぞれの楽器を持つ。

「どうにかソロのところを弾けるようにしないと」
ギターを弾き始めてから初めての大きな壁。
これくらいできなきゃ上杉くんたちに勝てない。せっかく奏がボーカルをやってくれるんだ。そんなときくらい、僕が演奏を引っ張るんだ。

「よーっし、頑張るぞ！」
パンパンッと自分の頬を叩いて、気合いを入れ直した。

それから、どれだけの時間が経っただろうか。
すでに窓の向こう側は真っ暗で、コウモリなんかが上下に揺れながら飛んでいる。

雄貴は、腕が疲れたと言って休憩中。僕は、近所迷惑になることを気にして、アンプに繋がずにギターを弾いている。ソロは、まだ完成していない。
そして奏は、

「すー、すー」

部屋の角でベースを抱いて寝ている。

「そろそろ終わりにしようか」

「そうだな、もう夜だしな。おい真琴、奏起こしてやれ」

僕は「はいはーい」と答え、奏の横にしゃがんだ。

「おーい、奏ー、起きろー」

呼びかけながら肩を揺する。
まったく起きる気配がない。

「困ったなぁ」

どうしたものか。雄貴に「助けてくれー」と視線を送る。
なぜか笑顔を返される。なんだその「健闘を祈る」みたいな顔は。

「奏ぇー、起きてよぉー」

僕の弱々しい声は、睡眠中の奏の耳には届かなかった。
ガックリと肩を落とすと、後ろで雄貴が口を開いた。「真琴さぁ」

「なに？」

雄貴が少し間を開けて、ニヤニヤしながら、

「お前がおぶってけば？」

なんつー提案だ。こいつ、人事だと思って。

「でも、いい方法だと思うぞ。ギターとベースは、俺ん家に置いてきゃいいし」

んー、確かにそうだ。

僕の考える優しさ

仕方ない。ほかに方法はなさそうだ。

「じゃあ、ギターとベース置いてくから。じゃあね」

「おう」

僕は、メトロノームのように寝息を立てている奏を背中に背負い、枝川家をあとにした。

おぶってみると奏は、思ったよりも軽かった。

『思ったよりも軽かった』んだよ？

別に重いと思ってたわけじゃなくて、軽いと思ってたけど、それ以上に軽かったってこと。

それにしても、

「気持ち良さそうに寝てるなぁ」

背中に奏の体温を感じる。冬だったら、いい感じに暖かいんだろうけど、現在、季節は夏に片足を入れているような状態。

少し暑いかな？　でも、まぁいいさ。こんな誰もが羨むような状況なんだ。

「……んー、むにゃむにゃ……あれぇ？　ここはぁ？」

どうやら奏は起きたようだ。

寝ぼけていて、状況に気づいてないようだが。

「んー、ん？　あれ？　えっ！？　真琴くん！？　えっ、ちょっ、えっ！？」

あ、気づいた。

「おはよう……じゃ、おかしいかな？」

「えっと、えとえと……！　その、ごめんね、あたし重かったでしょ？」

その質問に、奏を背中から降ろしながら答える。

「全然。軽かったよ」

「そ、そっ……か」

奏が照れ笑いを見せる。

「ありがとう」

なんだか、照れるな。よく考えると、この場所でこれを言われるのは二回目だ。

あれは春の夕方。

今は夏の夜だが、言葉にこもった感情と奏の表情、そして僕の照れ具合は同じだ。

「真琴くんってさ、本当に優しいよね」

「ほぇ？」

突然の言葉に、間抜けな声が出てしまった。
奏は、気にせずに続ける。

「さっきだって、お弁当、美味しいって言ってくれたし、今だって文句も言わずにおぶってくれたし。それに――――」

「だって本当に美味しかったから」

奏の言葉を遮るようにして言った。
それ以上聞きたくなかったからだ。

「僕さ、優しいって言われるの、あんまり好きじゃない……って言ったらなんか違うけどぉ、まぁとにかくあんまり言われたくないんだ」

「どうして？」

「だってさ、全部、僕が勝手にしたことだからさ。もしかしたら、それは本当に優しさなのかもしれない。けどそれを自分で優しさだって自覚しちゃったら、それはもう優しさじゃない気がするんだ。優しさってのは、与えようとして与えるんじゃなくて、いつのまにか与えてるものだと思うんだ」

奏は、黙って頷いていた。
長々とした僕のくだらない話を、ちゃんと理解してくれたらしい。

途中のあれ

「やっぱり真琴くんは、優しいや」

奏は、そう言って微笑んだ。

そんな奏に、「奏だって十分優しいよ」

と、言ってやると、表情が微かに変わった。

月明かりに照らされる笑顔は、やっぱり照れていた。

「またお弁当作ってくれる？」

僕の問いに、奏は照れ顔で答える。

「ギターソロが弾けるようになったらね」

僕は、一日でも早く弾けるようになると心に誓った。

またあの見た目×の味◎の奏特製手作り弁当を食べるために。

理由が不純？　別にいいさ。理由なんか、ただの飾りだ。

性格が単純？　そうさ、僕は、単純でアホだよ。

「帰ろっか」

僕は、奏に声をかけ、そして月明かりに照らされる夜道を並んで帰った。

二週間、というのは意外にも短く感じた。
ひたすら二つの曲を練習し続けて、なんとか弾けるようになった。
”キャッチボール”のギターソロの部分は、まだぎこちなくて、たまに間違えたりするけれど、それでも、明日は大丈夫そうだ。
明日、前回の渡り廊下ライブからちょうど二週間。『放課後　渡り廊下対決ライブ（命名僕）』の日だ。

「というわけで明日、ついに対決の日だ。明日に向けて、あと一回ずつ合わせて演奏しようぜ」

「そうだね」

「やろうか。それで今日は解散ね」

現在、時刻は午後7時。
今日も学校から帰ってきてから雄貴の家で練習していた。
窓の外を覗くと、辺りはまだ若干明るい。季節の足が夏に伸びてることがよく分かる。

「じゃあ、キャッチボールから合わせようか」

「そうだな、じゃあいくぞー。ワン・ツー・スリー・フォー！」

雄貴の合図により、楽器の音が重なりあった。

途中までは順調に演奏してきた。ここからが問題だ。
二番の歌詞が終わり、間奏。そうギターソロだ。
野球で鍛えた自慢の左指を素早く動かす。そして――――できた！

「真琴くん上手、上手ー！　さすが真琴くんだよ！」

「ありがとう。本番もこの調子で頑張るよ」

僕は、あからさまに照れていた。

そして、本番も頑張るぞ！　と燃えていた。

「じゃあ、次は”七月七日”だね」

「よし、いくぞー」

また、雄貴の合図により、それぞれの音が引っ張られた。

「か、奏……途中のあれは？」

「そ、そうだぞ。いきなりビックリしたぞ」

なんで、僕と雄貴がこんなに驚いているかというと、

「あれね、昨日考えたベースソロ。本番でもやっていい？」

間奏の部分で、とくになにもないようなところで、突然神業のようなベースソロを披露したのだ。

いよいよ今日

「別にやってもいいんだけど……あれを一日で？」

「うん、そうだよ！」

なんともまぁ輝かしい笑顔で答えるんだ。
奏が天才ベーシストだということを、あらためて実感した。

「相手のボーカルとベースが上手いんだったら、せめてベースだけでも勝たないと、と思ってね」

そして謙虚だ。
多分、今のベースソロがなくても、篠沢くんには勝ってたと思うよ。

「じゃあ、この夏、新たに生まれたこの二曲を引っ提げて、渡り廊下ライブに臨むぞ！」

「「おぉーッ！」」

三人のこぶしが、天井に突き上げられた。

水曜日になり、ついに対決の日。
天気は、青の絵の具をひっくり返したかのような晴れ。気温もそこそこで、風は髪がなびく程度。
最高のライブ日和だ。

そんな今日という日を仰ぎながら、いつもの道を歩いて登校している。
いつもと違うのは、雄貴が先に学校に行っていることだ。なんとも珍しい。
ドラムの調整だかなんだか、とにかくすることがあるらしい。

「とにかく、今日は頑張るぞー」

誰に言ったわけでもない、自分に向けた言葉だ。
しかし、その言葉に反応した人がいた。

「頑張ろうね、真琴くん！」

「うわっ、びっくりしたー」

いつのまにか、後ろに奏がいた。
奏は、小さなかばんと大きなベースを背負い、いつも通りの柔らかい笑顔で立っていた。

「今日、いい天気だね」

奏が空を見上げながら言う。
そして、

「んあー、気持ちいい」

と、伸び。
そしてなびく髪を左手で掻き上げる。
な、なんだかいつもより大人っぽくてドキドキする。
落ち着けぇー、落ち着け藤沢真琴ぉー。

「どうしたの？」

奏が心配そうに顔を覗き込んでくる。

そんな奏の髪から風に乗り、シャンプーの香りが鼻腔をくすぐる。

な、なんだ！？　いつもの奏と違うぞ！？　なんだ、このいつもと違う魅力は！

僕は、だんだんと混乱してきた。そして、もう一ついつもと違う所を発見。

「あれ？　奏、それ」

僕の指差す先、奏の頭には、白と水色のグラデーションの花が着いた髪どめ。

「似合ってるよ、それ」

と、思ったまんまの感想。

すると、奏はカァーッと顔を赤くし、風に流されて消えそうな声で言った。

「……ありがとう」

それにしても、どうしたんだろうか。イメチェンかな？

とりあえず、僕は疑問をしまったまま奏と並んで学校に向かった。

鯉？　違う、恋！

「豊田さん！　あれ見てあれ！　――――そう奏だよ。え？　いつもと同じだって？　違うんだって、いつもより仕草が大人っぽ――――え？　そんなことない？　いや、そんなことあるって！」

ほとんど一方的に僕がしゃべっている。

だって豊田さん、「いつもの奏と変わらない」って言ってるんだもん。

「じゃあ、あれ見てよ。いつもつけてないでしょ？　髪どめ」

「あ、そう言えばそうだねぇ。って、藤沢くん、よく見てるねぇ」

「別にそんなことは――――」

「あたしでも気づかないことに気づくなんて。え？　もしかして藤沢くん、奏のこと――――」

「違ぁーうッ！　そんなんじゃなーいッ！」

「まぁ、そんな照れなくてもいいって」

豊田さんは、そう言って僕の顔の前で手をひらひら。

別に照れてないし！

「そんな藤沢くんにいいことを教えてあげよう」

どんな僕になにを教えてくれるのだろうか。

「おそらく、奏を変えたものは、ズバリ、コイだね」
「鯉？　あの手ぇ叩くと近寄って来て口をパクパクするあれ？」
魚が原因でイメチェン？
女子というものは、よく分からない生き物だ。
「違うよ。その鯉じゃなくて、恋愛のレン。つまり恋」
「ふーん、恋ねぇ……恋！？」
ま、まさか、そんな！　いや、でも奏だって高校生の女の子だ。そりゃ恋くらいするか。
あーッ、ダメだ！　僕はこういう話に人並み以上に疎いんだ！
「まぁ、これはあたしの予想だけどね」
「ほぇ～、恋かぁ～。奏って誰が好きなんだろう」
僕がそう言うと、豊田さんが「えッ！？」と声をあげた。
「藤沢くん、きみ知らないの？」
知るはずがない。
豊田さんは知ってるのかな？
「知ってるよ。……って、もしかして本当に気づいてない？」
「なにに？」

豊田さんは、僕の顔をまじまじと見て、そして「はぁ」と深いため息一つ。

「きみは鈍器だね。まぁ、それが持ち味か」

「はぁ……？」

この人は時々、意味の分からないことを言う。
僕が鈍器？　そりゃ、頭とかは鈍器にもなるかもしれないけど、それは今関係あるの？
と、本気で悩んでいる僕の肩に手を置き、一言「まぁ、頑張れ」と言うと、どこかへ行ってしまった。

「なんなんだ？」

「頑張れ」ってのは、ライブのことか？
と、どこまでも鈍感な僕は、このあと雄貴に蹴られた。
なぜ雄貴に蹴られたかって？
まぁ、朝から豊田さんと話してれば、それはすでに蹴られる理由になるのかもしれない。

なんで職員室？

奏に見とれ、豊田さんと話し、雄貴に蹴られと朝から大忙しな僕は、四つの授業を乗り越え、五時間目に備えての準備期間、昼休みを向かえていた。
弁当で腹を満たし、友達と話し、職員室に呼ばれ（あれ？）、中田先生の前に立たされ（ん？）、怒られている（なんで？）

「まったく、それでも俺の生徒か」

「僕がなにをしたって言うんですか」

全然、心当たりがない。この若くて優秀な世界史教師は、僕になにを求めているんだ？
と、今だに分かっていない僕を見て、ため息を一つ吐くと、中田先生はしゃべり出した。

「今日の放課後に上杉たちと演奏で対決するんだろ？」

「はい」

「なぜ、それを俺に教えないッ！」

えぇッ！？　まさか、そんなことで怒ってるの！？

「こんなにお前たちを応援しているというのに……いいかッ！　俺は今日、ライブを見に行くからな！　不甲斐ない演奏したら成績下げるぞ！」

言ってることめちゃくちゃだな。職権乱用だし。
まぁ、それだけ僕たちを応援してくれてる、ということだろう。

「ありがとうございます」

とりあえず、お礼を言っておく。すると、中田先生はキョロキョロと周りを見回し、声を潜めて言った。

「お前な上杉には……いや、三組の連中には絶対に負けるな」

三組の連中には？　なんで、三組の連中には絶対に負けるな、なんだ？
たしかに上杉くんは、三組だけど。

「山崎先生のクラスにだけは絶対に負けるな」

山崎先生って、三組の担任だよな……あ、そういうことか。
僕は、職員室を見回して山崎先生を探した。山崎先生は、職員室の隅でコーヒーを啜っていた。
若くて優秀で見た目もよくて生徒からも絶賛大人気な国語教師。
なんか、いろいろ中田先生とキャラが被って、どこか中田先生よりも優れている先生だ。つまり、中田先生は、山崎先生にライバル意識を燃やしているわけだ。
僕たちを、そんな個人的なことに巻き込まないでください。

「やるからには、全力でやれよ！」

中田先生の最後の言葉には、やけに力が入っていた。

「はいッ！」

僕も力一杯それに応える。

中田先生の「さようなら」に合わせて四十人の生徒も「さようなら」と返す。
ある者は部活へ、ある者は自宅へ、ある者は委員会等へ、そして僕らは音楽室に立ち寄り、渡り廊下へ。

「あ〜、緊張してきたぁ〜」

僕の隣で、奏が両頬に手を当てて言った。肩にはベース、頭には髪どめ、襟元には赤いリボン。それぞれがひょこひょこと揺れている。

応援者たち

「あ、そうだ」と、ここであれを思い出す僕。

「中田先生が『やるからには全力でやれ』だってさ！」

担任の先生からの思わぬ応援に雄貴も奏も驚き、喜んだ。

「さて、じゃあ全力で演奏して来ますか！」

「「おおッ！」」

向かう先は渡り廊下。

渡り廊下には二つのドラムセットやアンプ、マイクなどが置かれている。さっき僕らが準備したものだ。

そして数人の暇人真っ盛りな生徒。「今からここでライブをする」と言ったら、ノリノリで「見るぜ！」と、これがこの藤咲高校の生徒のいいところ。

「おお、藤沢たちもう来てたのか」

渡り廊下の住民と化していた生徒たちとの雑談中、上杉くん率いる”Ｇｕｓｔ　Ｂｏｙｓ”が渡り廊下に到着した。さらに四人の後ろには睨み合いながら歩く二人の若い教師。

「中田先生、来てくれたんですね！」
「当たり前だ！　頑張るんだぞ！」
「はい！」
この一連の会話のあと、中田先生はまた山崎先生との睨み合いに力をそそいだ。
中田先生、山崎先生……大人気ないよ……。
「やっほー！　みんなー！　応援しに来たよー！　」
大人気ない二人の後ろから元気な声。豊田さんだ。
豊田さんは、奏といくつか言葉を交わすと、中田先生の横へ行った。
そして、入れ替わるように上杉くんが来る。
「どうやって勝敗をつける？」
「勝敗？　……あ」
どうやら肝心なことを忘れていたようだ。勝負ということは勝敗をつける術が必要になる。
誰もそんなこと思いついてなかった。
「とりあえず、ここにいる全員に『どっちの演奏のほうが好きか』を聞けばいいだろ」
雄貴の真面目な提案。
うん、その方法なら大丈夫かな。

「そうだな。あ、山崎先生は昔バンドやってたみたいだから上手いかどうかで判定してもらおうぜ」

上杉くんが大人気ない大人の片方を指差して言った。

「じゃあ、中田先生にも上手いかどうかで判定してもらおうよ。あの先生も昔バンドやってたみたいだし」

「そうか、じゃあそうしよう。あ、どっちから演奏する？」

「お前らからでいいぜ」

「分かった」

上杉くんが自身のバンドメンバーのもとへ歩いていく。なんだか、その背中が自信で溢れているように見えた。

「よし、じゃあまずゆっくり聞こうぜ」

雄貴に促されて隅っこに移動した。

5分くらいして、上杉くんたちの準備が終わった。

さてさて、偉そうだった篠沢くんの実力を見せてもらおうか。と余裕たっぷりだった僕は、あとから後悔する。

キャッチボール

「よし、じゃあ始めるぞ」

ドラムの夢見　進くんが全員に合図を送る。そして両手に持つスティックをぶつかり合わせた瞬間、突き刺すようなギターの音とズッシリとしたベースの音が混ざり合った。

す、すごい迫力――――

ギターとベースに驚いていると、そこにリズムを刻むドラムと言葉を連ねるボーカルが入り込んでくる。

「すげぇな……」

僕の隣で雄貴が唖然としている。

無理もない。彼らは本当に上手い。個人個人のレベルが高くて、全員で曲を作っている。

なんだろうか。演奏する前から負けた気分になる。

「真琴」

雄貴が僕の名を呼ぶ。

「負けちゃいねぇ。まだ負けてねぇんだ。俺たちは全力でやんなきゃなんねぇんだ」

久々に心を読まれた。こいつはなんでもお見通しだな。

そうだ、演奏する前から弱気になっちゃダメだな。

僕がそう思うころに、一曲目が終了する。

『続けて、二曲目行くぞ』

マイクを通して篠沢くんの声が響く。

二曲目も夢見くんの合図で曲に入る。

上杉くんの言ったことは本当だった。篠沢くんはベースもボーカルも上手い。あんな偉そうな態度をとれてもおかしくないほどに。豊田さんだって納得するだろう。本当に上手いんだから。

演奏が進むにつれて不安になってくる。勝てるのか？　本当に大丈夫なのか？　負けるんじゃないか？

『俺たちの演奏は終わりだ。次はあの三人の演奏だ。最後まで聞いてってくれよ』

篠沢くんの声で現実に引き戻される。もう出番だ。行かなきゃ。でも――――

「ほら、ボサッとしてんなよ、真琴」

「大丈夫だよ。あたしたちは全力でやればいいだけ！　それで負けたら仕方ないから、また頑張るだけだよ」

い、いつから奏は、そんなに頼もしくなったんだ？　今日の奏はやっぱりいつもと違っ――――あ。

「三人なら大丈夫」

奏が僕の背中を押す。

そうか、あのときからずっと奏は変わり続けてたんだ。なにも今日いきなり変わったわけじゃない。

僕も変わらなきゃ。

「よし、行こう」

僕は、ようやく重い足を上げて歩き出した――――三人で。

「よし、じゃあやるぞーっ！　俺たちは俺たちだけの演奏をするんだ！」

雄貴の掛け声に黙って頷く。

「行くぞ。ワンツースリーフォー！」

雄貴のドラムが連打されて、マシンガンのような音を出す。”キャッチボール”の出だしだ。

僕はギターに集中する。奏の声がマイクを通る。

『なにげなく誘った
キャッチボール君は文句も言わずに
やってくれた――――♪』

七夕と選択

静かな出だしに、聞いている生徒たちも先生二人もゆっくりと体を揺らしリズムを刻む。

『いざやってみれば
僕はノーコン
どこに飛ぶかわからない――――♪』

僕に歌わせるつもりで作ったこの曲。一人称は”僕”のままだ。曲のイメージ的にはそれがあっている。
奏の歌声に聞いている人はウットリとしている。奏も楽しそうだし、今回のボーカルチェンジは、効果ありかな。
さて、こっからサビだ。

『どこに飛ぶかわからない
魔球のようなボール
そんなボールを片っ端から
拾ってくれた
笑ってくれた
せめて一球くらいは
直球を君へ――――♪』

一番のサビが終わって二番。ここからは曲が盛り上がる。アルペジオばかりだったギターもコードが入ってくる。

『いつも君は笑うだけで
文句も言わず　投げ返す――――
どうして――――♪』

力のこもった『どうして』に心が揺さぶられる。一文字一文字の重みが込められてる。

『なに言ってるかわからない
魔球のような言葉
そんな言葉も片っ端から
拾ってくれた
聞いてくれた
せめて一球くらいは
直球を君へ――――♪』

二番のサビが終わった。
僕は、気をさらに引き締めた。なぜならここからは、あのギターソロなんだから。
失敗なんか出来ない。
僕は左の指を柔らかく、そして素早く動かし、右手を上下に行ったり来たり。
もう少し――――もう少し――――。
出来た！

『届け――――♪』

無事に奏の次の歌詞へ繋ぐことが出来た僕は、ここから曲を終えるまでの記憶がほとんどない――――。

無数に飛び交う拍手でハッとなる。
どうやら無事に一曲演奏し終えたみたいだ。
よかった。

『じゃあ、最後。二曲目いくね。”七月七日”』

安心するのもつかの間、奏の言葉により、二曲目が始まる。

『透き通った
夜空の川の向こう
煌めくあの星に
今　抱くこの想い
風に乗って飛んでいけ――――♪』

これで今日のライブの全ての曲が演奏し終わった。
僕たち三人は「ふぅ～」と息を吐くと、互いに顔を見合わせた。
だけど言葉は交わさずに、無言で頷いただけだった。

「さて、じゃあ、勝敗をつけようぜ」

後ろのほうで見ていた上杉くんが前に出てきて言った。

「俺たちの演奏のほうが好きだ、って人は俺たちの前に。藤沢たちの演奏のほうが好きだ、って人は藤沢たちの前に集まってくれ」

上杉くんの言葉で、そこにいる生徒の全員が動く。
生徒の数は十人。六人以上集まったほうの勝ちだ。

五対五……五対七

みんな「俺こっち」「え？　お前そっちかよ」「やっぱこっちだろ」
「こっちのほうが好き」と、言葉を零しつつ移動。
そして――――

「五対……五」

「引き分け……？」

見事に十人の生徒は五人ずつに分かれた。

「いや引き分けじゃねぇ。先生たちが残ってる」

雄貴の視線の先には腕組みをしている二人の若い教師。
彼らは好き嫌いではなく、実力で判定する。どっちのほうが実力が上なのか分かるってことだ。

「俺は、上杉たちだ」

山崎先生が上杉くんたちの前に行く。あとは中田先生だけ――――

「俺もこっちだ」

中田先生も上杉くんたちのほうに行く。
負けた。

「しゃあッ！」

僕たちの横で、歓喜の声が上がる。

「音無のレベルはこのなかでもずば抜けている。プロでも通用するかもしれない。だけどこれはバンドだ。個人の力ばかり高くてもダメだ。総合的に上杉たちのほうが上だった」

中田先生は少し言いづらそうに正直な感想を言った。中田先生に感謝しなくちゃな。ちゃんと言ってくれたことに感謝を。

「今回は俺たちの勝ちだったな」

気づくと上杉くんが雄貴の横に来ていた。

「まぁ、バンド始めてから数ヶ月しか経ってないお前らが俺たちに勝つなんて無理なんだよ――――って、おいまて、殴らないでくれ！」

雄貴が今にも襲い掛かりそうな様子で拳を強く強く、握りしめていた。

まてまてまて、先生たちの前で乱闘はまずい！

「ちっ、今回は負けたけど、いつか絶対追い抜いてやるからな！覚悟しとけ！」

あ、殴らない。どうやら自分で抑えたようだ。雄貴も成長してるんだな。

「誰が追い抜かれるかよ。でも、まぁまた一緒にライブしようぜ」

上杉くんが右手を開いて差し出す。

「ああ！」

雄貴がその手を握り返す。

おお、なんか熱血系のマンガみたい――――って、あれ？

「いてててッ！　てめぇ、このやろう！」

「なんだ、この程度で痛いのか。軟弱なやつめ」

「なにをぉ！　これでも喰らえ！」

「いてててッ！　いてぇって！　はなせーッ！」

なんにも成長してなかった。

二人とも。

帰宅ｉｎｇな僕と雄貴は、歩きながら、今日の反省をしている。ちなみに、奏は豊田さんと一緒に先に帰った。

「中田先生に言われたこと、覚えてる？」

「ああ、あの正直な感想だろ？　覚えてる」

よかった。雄貴の出来の悪い脳みそでも覚えててくれたか。

って、そんなことはどうだっていい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9613v/

三ツ星は夏空を見上げて

2011年10月11日07時02分発行